第27地区

アハトラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｓ０２７地区内でグローザは偵察作戦中、襲撃に遭い逃亡する。そんな彼女の危機を救ったのはＳ０２７地区の戦術人形達。それと武装した指揮官だったのだ……

これは元軍人の指揮官と戦術人形達が最前線で共に戦う物語である。

［注意］

ドルフロ本家のストーリーとはかけ離れてます。

基本シリアス調の作品ですが、たまにジョークを混ぜることがあります。ミリタリー系の知識はかじった程度。ミリタリーに詳しい方に情報提供してもらってますが、描写に間違いがあるかもです。もし見つけても暖かい目で読んでもらえるとありがたいです。

「告知」

連載予定時刻やちょっとした小話、企画を活動報告で載せてます。よかったら目を通してくれるとありがたいです。

目　次

設定資料
設定資料　更新内容、ホワイト・レイヴン追加 ―― 1
1章　出会い
1―1 ―― 7
1―2 ―― 15
1―3 ―― 27
2章　襲撃
2―1 ―― 37
2―2 ―― 47
2―3 ―― 57
3章　エアボーン
3―1　嵐の前触れ ―― 66
3―2　降下 ―― 78

設定資料

設定資料　更新内容、ホワイト・レイヴン追加

設定資料

物語が進むと増えるます。

［メインキャラ］

・ヘンリー・ブラッドフォード・レイランド

指揮官ネームはハンク。指揮官コードはＶ６１３７２。年齢は３０歳前半、アメリカ系。元々軍の大尉だったが軍とグリフィンとのパイプ役として軍を辞任。そのまま天下る形で指揮官へと転職した。前線勤務だったのが抜けて切れておらず時より前線へ行くこともしばしば。人形の対して優しく接することがあり、救援人形達を手厚く歓迎する。

・装備について

タチャンカヘルメットを常に使用している。ただし本家より改善されており、重いのに防御面に難ありという品物では無くなっている。ただし視界が狭くなる欠点は依然として健在である。

また素顔隠すようにガスマスクを装備している。そのためタチャンカヘルメット使用時、とてつもなく視界が悪化する欠点がある。しかし防御力は絶大である。

チェストリグ、ポーチは黒一色。状況に応じて迷彩柄に変えることがあるが基本は黒であることが多い。ブーツも同様である。

グリフィンを示す赤いコートはあまり使用しないことが多い。本人曰く「赤は目立つし似合わない」とのこと。重要な式典等には着用するが、通常時はもっぱら野戦服。たまに現場の兵士と間違えられることもしばしば。

・武装について

基本なんでも扱える。状況に応じて使用する武器を変え任務に赴く。特に武器にこだわりがないため、武器庫から適当に取って来て出撃ということも多々あった。縛りは無いものの西側諸国製が多い。

近接武器はナイフかトマホーク。使用頻度は少ない。
・戦闘力
本人は「トーシロー」と言ってるがかなり高い方。鉄血とかなり戦闘してるためかなり戦争慣れしている。戦術人形と共に作戦遂行出来るくらい戦闘力が高い。前線にいる場合、指揮はマジックに任せる事が多い。
副官はＶＺ―６１スコーピオン。婚約済み。
・マジック
３０歳後半。メガネとコマリンクを常に装備している。
管制官や指揮官不在の時は代理を務める。かなり大真面目で冗談を理解するのに数秒遅れて理解するほどである。どんな相手にも～です、ますの口調で話す。
・コブラ
金髪で２０歳前半。ヘルメットにはコブラのイラストが描かれてる。
ガンシップやヘリのパイロットを務める。操縦の腕はかなりのエリートであるがトリガーハッピー気味である。明るく誰とでもフランクに打ち解け合う。
・代表
軍のお目付け役兼スポンサー。正体を隠すため部屋の逆光を使い顔や体を隠している。元新ソ連の将校だったという噂がある。グリフィンの社長であるクルーガーとは旧友であり、連絡こそ取らないがなにかと便宜を図ったりする。軍でもかなり上位な存在だが本人が全てを明かさないため謎である。ハンクとは上司と部下の関係でもあるが、雑談や相談などたわいも無い話もする。代表は公言してないが本人もかなりの戦闘力を持つ。
[用語]
Ｓ０２７地区
元々は軍が鉄血を殲滅、市街地への被害を抑えるために前哨基地を建設。しかしたび重なる襲撃にあい配備していた大隊や装備、車両が壊滅に近いほどの打撃を受けた。これにより軍上層部は鉄血を脅威

と見做し、グリフィンへ援助を受けることをした。その際、代表とクルーガーが友人だったことが功を奏し援助を受けることになった。その際、Ｓ０２７地区と命名された。

戦術人形にとって必要な設備や施設は揃っており普通のグリフィンの基地と変わらない。地上にはあまり施設が無いが地下にはかなりの施設が備わっている。宿舎やバーと言ったレクレーションや武器庫や開発部なのど戦闘面でサポートする施設も備わっている。

現在、ハンクが指揮官として配属されている。

抵抗者

対鉄血を目標として結集された民兵組織。規模はかなり大きく、小規模な鉄血に対して撃破してる事例がある。装甲師団としてテクニカルや既に就役を終える軍用車を揃え運用している。また航空戦力としてＣＯＩＮ機を保有している。しかし装備、武装の質はマチマチでＭ４やスカーと言った軍用アサルトライフルからハンティングライフルや上下２連のショットガンなど様々。

抵抗者は１番大きな対鉄血組織であり他にも様々な対鉄血組織があるが全てこの組織から分離独立している。

グリフィンと軍とは概ね良好な関係である。

軍

国は未定。元々は新ソ連の進行を食い止めるために結成された。しかしそのような事態は起きなかった。そのため最近までは軍費は少し減少傾向だった。

しかし鉄血の暴走後、流れるようにして進行を開始。領土の３５％が鉄血の占領下となった。市街地へ戦闘が発展するのを避けるために前哨基地などを建設しだが物理の前では苦戦を強いられた。そこでグリフィンと協力関係を結び掃討任務を開始した。

兵器は西側東側関係なく配備されている。これは軍の内訳が東西と共に５０％で割れているからである。

１．５世代人形

１世代人形より複雑な命令を遂行でき、第２世代の人形より重武装なのをコンセプトに開発された人形のことを指す。重武装で素早く

移動できるのをコンセプトに開発を開始した。使い捨ての長距離用のスラスターや複数の目標を狙うミサイル、照準を合わせにくくなる装甲など新しい技術を惜しみなく使った。しかし量産性と汎用性がとてつもなく低く、費用がとてもかかるため早々に廃案とされた。

試作機が何機が作られ地下に保存されており命令一つで作戦開始出来る。

ホワイト・レイヴン

試作番号９通称ホワイト・グリント。色合いは名前の通り白。開発コンセプトは重武装、高機動な防衛兵器。元ネタはＡＣｆＡのＮＯ・９、ホワイト・グリント。

・見た目

頭部は本家ホワイト・グリントのように横に伸びている。目にあたる部分は青色のバイザーでイメージは漢陽８８式の純白の流星は願いを乗せてのガンダム風な機体。

胴体は旅客機のような緩やかな三角形の出っ張りがある。胴体と腰を繋ぐ部品は細いが装甲は一切ない。

腕部も同じで胴体と腕部を繋ぐ関節部分も装甲が無い。腕部も白い装甲で覆われている。肩は大きく突出している。これは武装を安定して装着、運用出来るようにしているためである。

脚部は細く作られている。これは足回りの機動性を確保、スラスターなどの追加ブースターなどの取り付け時に干渉を起こさないようにするためである。関節部分の装甲は前面と後ろのみ。側面に装甲が無い理由は高機動による回避性の高さと、敵と戦う時は側面を向けずに正面を向けて戦うからである。足回りにスラスターがある。片足に２つずつ装着しているため、飛行や地面を素早く滑降することに長けている。またとっさの回避を行うためにも使われる。

・背中

背中には大きなバックパック状のメインブースターがある。燃料が多く高速で空を飛行し最前線へ向かうのに使われる。それ以外にも空中を浮遊したり、緊急回避を行う時に使用する。また拡散ミサイルランチャーがある。その他にも翼を使用でき、そこに固定式のミサ

イルやキャノン砲を搭載できる。

・武装

出撃時１０ミリ鉄鋼弾を装填したアサルトライフルを使用。装弾数は６０でほぼ無反動。あくまでも1．５世代や反動を抑えるほどの出力を持った人形が扱える品物であり、第一世代や人間、一部の戦術人形は扱え無いほどピーキーである。また、予備弾倉を携帯しないことが多いため慎重な射撃が求められる。

バックパックには拡散ミサイルを搭載したランチャーがある、これはミサイルが目標をロックオンするとミサイルが発射される。次に飛翔中に内蔵された3発のミサイルが射出しターゲットを追尾する。被弾すると被弾した箇所の装甲を破壊し内部に衝撃と熱、爆風でダメージを与える。装弾数は多くないが一度でも被弾するとマンティコアですら大破に追い込む。

両手には上記の武装が使えない、白兵戦を想定しエネルギーブレードを展開する機能がある。バッテリー式で必要な状況だと判断して使用する。切れ味は鋭く鉄血人形なら真っ二つに出来る。強力な反面、貧弱なバッテリー容量のせいで短時間でしか使用できない。

・開発の経緯

高速で移動し防衛部隊の驚異となる敵装甲師団に致命的な火力で迎え撃つのがコンセプト。例えるなら二足歩行する対地攻撃機。武装の貧弱さはこれが理由である。弾切れを起こしたら、撤退後速やかに補給し再度前線に向かう。そのため装甲は薄いが、重武装で機動力が高いためその点で生存力を高めている。

さらにＡＩを搭載。その場の戦局で適切な判断をし臨機応変に対抗できる。ＡＩは女性で、決して自分の信念を投げない性格。優先目標は仲間を守り、仲間を脅かす敵の脅威の排除。几帳面な性格でもあり、無駄な射撃を好まない。少ない手数で効果的に結果を出すのを好む。そのため精密射撃に長けている。

強力な攻撃手段を持っているが、無視できないほど装甲が薄い。Ｍ２ブローニングでも傷つきやすくその度に装甲を直していた。関節部分に損傷があるとそれを直すためかなりの時間を使う。また燃料

の消費スピードと量がかなり多く補給ラインを逼迫した。極めつけは武装。この人形だけの補給物資が多く、頻繁に補給するのも相まって補給物資の消耗が激しかった。運用すると物資の大半をこの機体に注ぎ込まないと、ベストパフォーマンスを発揮するのは難しいのである。

総合的に使いづらいと判断され、計画廃棄と共に地下基地へ格納されることとなった。数十年後、代表はこの機体に目をつけた。そして新たに「人類を守る」とプログラムし運用した。それ以降彼女はこの基地のガーディアンもとい最終防衛の要という役目を与えられ、その力は弱きもののために使っている。

1章　出会い

1―1

時刻：13：34　天候：晴れ

Ｏｔｓ（グローザ）―１４は森を彷徨った。その姿は猫に追われてるネズミのように惨めだった。隠れられそうな木を探し続けた。そしてひときわ大きい木の後ろへ隠れた。木を背にし辺りを確認する。追手は来ていない。その間は己を破壊するか敵を破壊するか悩んだ。

彼女の持ってるグローザは正確な残弾は不明。ただし半分より少ないのは感じ取っていた。その上予備マガジンは無い。今装填しているマガジンが最後（ラストマガジン）の弾薬だ。

救援を求め無線を弄る。しかしジャミングの影響を受けているせいで雑音しか流れてこない。チャンネルを変えても結果は同じだった。

「クソッ、なんでこんな目に遭うの……」

息を吸うように毒づく。自分が置かれてる絶望的な状況を再び認識した。抵抗しようにも敵の量が鰯の群の如く多い。残弾のせいで全てを倒すのは不可能だ。そもそも反撃したとして、敵に位置がバレて返り討ちに合うのがオチだろう。さらに長時間休まず稼働してるせいで、精密射撃が出来るかどうかも怪しい。

更に状況は悪化する。物音が聞こえ、耳を研ぎ澄ます。カサカサと茂みが擦れ合う音が聞こえる。それもかなりの量だ。ここに動物がいないのはブリーフィングで知っている。つまり音の主は鉄血だ。

聞こえてくる音の量、距離で圧倒される。いつもならどうともない有象無象。しかし今回は違う。貧弱な戦力に対し、鉄血の波がこちらに向かってくる。体が強張り、手が震える。恐怖で呼吸も荒くなる。同じような考えが浮かんでは消えていく。

”鉄血に倒されるくらいなら自害した方がマシだ”

そんな考えが頭をよぎる。それは氷のように冷たく脳内に響き渡った。その後の行動には迷いが無かった。おもむろに手をポケッ

トに突っ込む。取り出したのはインスタントカメラのフィルムケース。ケースに傷がないのを確認すると、利き手の左側に穴を掘り始める。掘った穴は浅いが横に縦にな伸びていた。彼女はその穴にケースを埋めた。行動が終わると「ふぅ」と短くため息をつく。その時、口角が上がり微笑んでいた。

私は頑張った。指揮官の足を引っ張りたくない。そんなことを思いながら銃を顳顬(こめかみ)に向けていた。バックアップは……取ってある。ここで死んでもまた指揮官の元へ戻ってこれる。任務も遂行した。心残りは生きて指揮官に会えないこと。けど捕虜になるくらいなら死んだ方がマシ。

彼女が銃のトリガーを引こうとした。その一瞬の静寂を破ったのは、無線機だった。沈黙していた無線機が反応した。

「こち……願う……らまじ……」

初めて無線機が反応した。『誰か居る』そう思った彼女は無線機に飛びついた。チャンネルを一つ一つ丁寧に慎重に合わせる。せっかくのチャンス、決して無駄にはしたくない。希望を掴み取るためしがみついた。

「こちら”マジック”応答願う、繰り返すこちら”マジック”……」

「こちらＳ０５地区の第３部隊のグローザ！」

無線の主は男だった。その声は落ち着いていて、明瞭だった。もしかしたら援軍が来るかもしれない。そう考えると安堵が体を駆け巡った。しかし、鉄血達の足音を聞き再び緊張が走った。

「我が部隊は偵察任務中、鉄血の襲撃に遭い部隊が全滅。生存者は私だけ……」

偵　察任務の内容は”鉄血のハイエンドモデルの写真を撮れ”という内容だ。ここ数日、目撃情報が増加していた。またそれに比例するように、人形達の被害も増加している。そこで司令部は対策を練るため偵察部隊を編成した。事は順調に運んだ。ハイエンドモデルを確認すると撮影を開始した。撤退しようとした時、部隊の１人が狙撃された。それを皮切りに潜んでいた鉄血達が攻撃を始めたのだ。その結果、部隊は散り散りとなり退却した。逃げ延びた仲間も追手に殺

されていき、グローザただ1人となった。
「なんとか生き延びたけど、そろそろダメみたい。奴らがもう近くにいる……」
耳を傾けると草木を踏み前進してくる音が聞こえる。頭だけ出して周囲を確認した。鉄血のガードやヴェスピドが辺りを警戒し捜索していた。木々の裏を入念に確認し、気づかれないようにゆっくりと歩く。鉄血達とグローザの距離は約２００メートル。見つかるのも時間の問題だ。彼女は生き残れる方法を考えた。今使える手札で、自分の置かれてる状況で、生き残る術を考えていた。
「了解した、３０秒後航空支援を開始する。そこを動かないでくれ」
彼女の思考は分断される。……今なんて？　航空支援？　援軍じゃなくて？　彼女はその無線に戸惑う。それは衝撃的で謎だった。疑問点はまだある。何故こんなにも早く支援できるのか。グリフィンが使用している輸送ヘリは最短でも2分。しかしこれはあくまで理想値。通常でも＋1分、森林のような悪地なら倍近くかかる。最も短いのは砲撃妖精や空襲妖精の火力支援を行える妖精であろう。一回切りではあるが1分内に必ず支援してくれる。ただしこれは人形の部隊と一緒に組む必要がある。そのためこの線も違う。そんなことを考えてると上空から騒音が聞こえてくる。それと同時に風が押さえつけるように吹いてくる。答えを知りたくて上を向いた。
ＶＴＯＬの反撃が始まった。機関銃ガトリングから解き放たれた３０ミリが鉄血を襲った。ガードの盾は粉々に砕かれる。頭部に当たった者は、頭部が破裂し倒れる。胴体に食らった者は、真っ二つに引き裂かれた。空薬莢が雨のように流れ落ちる。幸い、グローザのいる位置までは空薬莢は落ちてこない。
次にミサイルポットから風を切り裂くようにミサイルが放たれる。それが地面に当たると、轟音と衝撃が降ってきた。衝撃で物理的に視界が歪む。遅れて爆風が襲う。飛ばされそうになるほどの風圧だった。彼女は隠れてた木の後ろへ避難した。
次　は爆音と熱風が彼女を包み込む。そっと頭を出して周囲を確認する。その光景にゾッとする。地面から炎が舞っていた。立って

いる鉄血が歪んで見える。ガソリンの独特な匂いが充満する。そして遅れて何か焼け焦げる匂いが漂ってくる。焼夷弾ナパームだ。彼女は確信した。炎は鉄血達に襲い掛かる。鉄血は炎から逃げようと奮闘していた。しかし次第に動きは鈍くなり、止まってしまう。その間に炎は鉄血を飲み込み燃やしていった。

リッパーやヴェスピドのような量産型はオーバーヒートの影響をモロに受ける。初めはだんだんと動きが遅くなり、最終的には処理落ちしてしまう。処理落ちを起こした者は回復するまでその場に留まっている。そのため鉄血に火炎瓶を投げ込んだ場合、その後の運命は皆同じである。再起動中に回路が焼け、コアが破壊される。つまり死亡する。

騒音の主はＶＴＯＬ。取り付けられている機銃やミサイルポッドを取り付けてあるのが下からでもよく分かるくらい低空で飛んでいた。地面と垂直になってる大きなダクテッドファンは騒音を立て前進していた。その姿にグローザは呆気に取られた。何故ならグリフィンにはこのような軍用機は無いからだ。

鉄血達も上空の異常に気付いた。呆気に取られたグローザに対し、即座に銃を向ける。そして射撃を開始した。エネルギー弾の弾幕が機体を襲う。鉄血の群れは想定の倍以上いた。あちらこちらから放たれる青い光は空を駆け巡った。しかしＶＴＯＬは無傷だった。鉄血の武器では機体に傷をつけるので精一杯だった。

そしてグローザの前の方から銃声が聞こえてくる。軽くて弾けるもの、重くて空気を切り裂くようなもの。まさに選り取り見取りだった。その音たちは段々と大きくなる。どんどん近寄ってくる。

「よっ、大丈夫か？」

急に話しかけられ、ビクッと身体が震え振り向く。目の前には１人の戦術人形が立っていた。気怠そうな態度、目元には真っ黒な隈。その状況に似合わないような大きなあくびをした。その人形が寝不足なのは見れば明らか　だった。

「貴方は、ＡＡ―１２……？」

グローザは慎重に丁寧に確認をとった。それに比べてＡＡ―１２

は、
「そうだよ、あんたを助けに来たんだ」
と軽く単刀直入に話した。ＡＡ―１２は棒キャンデーの包みを確認しながら答える。それを聞いた途端、グローザは安堵の気持ちでいっぱいだった。力が抜け地面へ座った。力んでた体が布団のように軽くなる。しかし自分が置かれてる立場が解決してないと思い出す。急いで起きあがろうとした。それを見たＡＡ―１２は驚いた。
「おい！起きちゃダメだろ。そこにじっとしてろ」
ＡＡ―１２は起きようとしたグローザを静止するように、肩に手を置き押さえつけようとした。しかしグローザはその手を払い除けて起きあがろうとする。その目は闘志に満ち溢れていた。
「……私だって反撃しないと気が済まない」
「あのなぁ、あんた怪我してんだよ？そこじっとしないとダメ。分かった？」
「ふふ……それでもよ。あたしを追い込んだ蛆虫どもにお礼がしたくてね」
グローザは微笑むと手に持ってるＯｔｓ―１４を半コッキングした。薬室に弾丸が装填されてるのを確認する。グローザの姿は負傷兵のようだった。彼女が着てるコートは穴が空いていた。逃亡中に撃たれたのが原因だろう。また砲撃にあったのか、一部焼け焦げ黒くなっていた。朱色の髪も黒く焦げた跡が見て取れる。長髪も相まってその跡は非常に目立っていた。身体には目立った外傷は無い。しかし一直線に赤くなってる跡が頬や二の腕、太ももにはっきりと見える。その数は片手で数える程度だが、鉄血がかなりの数いた事を物語っていた。普通に考えてそのような出来事を体験したのなら恐怖し体はすくむ。だが彼女は違った。その顔は闘志と殺意に満ちていた。
そんなグローザを見ていたＡＡ―１２は思わずため息をついた。その顔はどこか諦めていた。グローザの表情を見て考えを変えたのだ。いつもの調子でポケットから飴を取り出し口の中に放り込んだ。先程触った棒キャンデーではなく、プラスチックの包みに包まれてい

る飴だ。
「別に死ななきゃいいか」
ＡＡ―１２はそう自分に言い聞かせた。
束の間の静寂と平和。しかしそれは呆気なく崩壊する。炎から１人、また１人。人のようなシルエットがこちらに向かってくる。ＡＡ―１２はそれに銃口を向けた。飴を噛み砕き臨戦態勢をとる。味方では無い。そのシルエットは鉄血の生き残りである。だんだんと姿が見えてくるとＡＡ―１２は毒ついた。
「ちえっ……ブルートか」
炎から現れたのはブルートだった。鉄血の中でも白兵戦に長けており、高速で接近し対象をナイフで切り付ける。高火力で足も速く、処理に手間取ると前衛が崩壊する。唯一の救いは耐久値が低いところだろう。敵は３体。ブルート達はＡＡ―１２を視認するとナイフを構え突撃した。いつものような速さでは無い。しかしその気迫は現在だった。
ＡＡ―１２は右から攻めるブルート以降同じに銃口を向ける。右から左へ流れるように処理することに決めた。ＡＡ―１２はトリガーを引いた。グローザの目の前に空薬莢が流れ落ちる。その弾丸は吸い込まれるようにブルートの胴体へ飛んでいく。そして弾丸はブルートに当たった。ブルートの体は破裂し右腕が吹き飛ぶ。右腕は宙を舞い、爆発した衝撃で破壊された胴体は地面に叩きつけられた。
次は真ん中のブルート。距離にして約１５０メートル。素早く片付けるためＡＡ―１２は２発、胴体に撃ち込んだ。２発撃ち込まれたブルートは見るに耐えない姿となった。上半身はどこかに消えてしまい、下半身は制御を失った。大きく足を開くとその場に一回転し地面に着地した。ドサッと音を立て、鉄の塊へと変化した。
最後は左のブルート。距離にして１００メートル。最後の１体は素早く距離を詰めてきた。オーバーヒートから回復し、本来の速さとなっていた。ＡＡ―１２はそんな姿を見て愚痴を呟いた。
「……ウザい」

ＡＡ―１２は頭に照準を合わせた。一撃で葬り去るために。さっさと終わらせて帰るために。ＡＡ―１２は１発、素早く撃ち込んだ。頭部が破裂し、大きく後ろによろける。制御を失った胴体は地面に倒れ込む。大きく上がった足も同じように倒れる。襲撃を試みたブルート達は１分後、鉄屑となっていた。その姿はスプラッタ映画のような無惨な姿へと変貌した。

そんなブルートの残骸を見てＡＡ―１２は笑顔になった。自分も含め損害ゼロ、つまりパーフェクトゲームである。

「よしっ！」

ささやかな勝利だった。ＡＡ―１２は嬉しくなり小さくガッツポーズをした。グローザはその姿を見て驚いた。いつもネガティブで気怠そうな彼女が、他の子達と同じように嬉しそうにしているのだ。驚いたのはそこだけでは無い。何故ブルートが爆発したのか。ＳＧショットガンに装填されている弾薬はスラッグかバックショット。どう考えても爆発を引き起こすものとは無縁である。いくら量産機でも誘爆するような雑な設計では無い。それも老舗である鉄血なら尚更である。グローザはＡＡ―１２の空薬莢に注目をした。付近に落ちているものを拾い目の前で見る。その空薬莢は黄緑色をしていた。緑でも赤でも黒でも無い、黄緑色である。グローザは１つの仮説を立てた。

『彼女の装填している弾薬はフラグ弾では無いか』

フラグ弾、正式名称”Ｆｒａｇ１２榴弾”。ＡＡ―１２の専用装備。この弾薬はグレネードに比べ、小規模ではあるが爆発させることが出来る。これを装填したＡＡ―１２は、小さなグレネードランチャーとして生まれ変わる。連射性と破壊力が併せて凶悪な武器に早変わりする。そのため”多数の相手に有利”、”破壊活動にうってつけ”という謳い文句を聞いたことがある。しかし、そもそもの使い道がニッチすぎる点。さらに手榴弾（グレネード）やグレネードランチャーで代用できる点。それらを考慮して開発が中止されたという弾薬なのだ。グローザはその仮説に軽く驚愕する。何故そんな弾薬が使われてるのか。それと対照的に暇を持て余したＡＡ―１２は再び飴を舐めは

じめた。コロコロと音を立て口の中で遊んでる。その姿は完全にリラックスしていた。

突如、ＡＡ―１２は後ろを振り返る。ＡＡ―１２の目はどこか見つめていた。グローザは誰かの視線を感じた。そしてＡＡ―１２の視線を追う。じっと見ていると、後ろから人影がゆっくりと近づいてくる。遠く木々の影響で見にくいが、銃を持っているのは分かった。ＡＡ―１２はその人影が味方であると分かると、口を開けた。その一言にグローザはまた驚愕した。

「よっ、指揮官。残念だけどあんたの獲物は無いよ」

後編へ

1―2

「よっ、指揮官。残念だけどあんたの獲物は無いよ」
「心配しなくて結構。道中5体くらい倒してきた」
グローザは指揮官と呼ばれる男を見た。見れば見るほど「果たして指揮官なのか」と疑問が湧く姿だった。まずは頭部。頭にはバリスティックヘルメットを装備しており、顔を覆うようにガスマスクを装備していた。色はどちらとも黒。そのため表情が分からず、不気味さと威圧感を兼ね備えていた。視界を確保するための2つ穴が、唯一顔が分かる部分である。ヘルメットをよく見ると、バイザータイプのフェイスシールドらしきものが地面と平行になるように頭部上に装着してある。ここからだとよく分からないが、警官が装備するような半透明のバイザーでは無く、色合いがロシアングリーンに酷似していた。
次は胴体。服装は黒の戦闘服で、チェストリグもボディーアーマーも黒一色だった。右腕の腕章とボディーアーマーにはグリフィンを示すパッチを付け、M4A1を装備していた。見える限りで覗いてみると、レーザーポインター、ホロサイト、サプレッサー、グリップが取り付けられており、右手でグリップを握っていた。サイドアームは右腰に携行しやすい黒いホルスターに入っていた。腰回りにはメディキットや弾薬ポーチが並んでいた。その中で目を引くのは、特徴的なワッペンだった。模様はスパルタ兵が盾と槍を持って横に向いており、腰あたりに刻まれた文字には縫われていた。左胸にはナイフが鞘に収まっている。咄嗟に扱えるようにグリップは上方向に収まっていた。
最後に脚部。こちらも胴体の戦闘服と同様に黒かった。その上に黒のニーパットを装備している。膝だけでは無く、膝から数センチ下の方にもクッションがあった。
「マジ？漏れがあったの？」
「多分な。恐らくナパームの海を渡ってきたんだろう」
「アイツらも懲りないね。さっさとくたばればいいのに……」

赤の他人が聞いたら差別だと言われそうな発言をする。鉄血に対して憎悪と軽蔑を示しているのは明らかだった。しかし当の本人は気にしていなかった。再びポケットから飴を取り出して舐める。指揮官と呼ばれる男はグローザの方を向き、グローザの顔が見えるようにしゃがんだ。相変わらず表情は見えない。しかし、どうにも見られている気がして体が少しこわばる。それがひしひしと緊張を煽り、グローザの心拍数も上がっていくのを感じた。

「貴方がグローザ？」

先程の雑談に比べ改まった態度に少し困惑する。状況が読み込めておらず、まだ困惑しているのか、呼吸も少し荒い。

「この部隊の指揮官、ハンクだ。よろしく」

それと同時に右手を差し伸べられる。数秒の間が空く。その静寂を破ったのは指揮官だった。

「それで貴方の任務は？」

指揮官（と思われる男）はグローザに質問する。グローザは相槌を打ち、差し伸べられる手を掴み立ち上がる。

「本当に指揮官なの？」

質問を質問で返すグローザ。彼女の質問に対し彼は大袈裟に敬礼をした。

「グリフィンから派遣されたＳ０２７地区の指揮官、ヘンリー・ブラッドフォード・レイランド。指揮官ネームはハンク。指揮官コードはＶ６１３７２」

淡々と個人情報を話す姿を見て唖然とする。特に指揮官コードは指揮官の住所と履歴書のようなものだ。これをグリフィンのデータベースにかければ、どんな経歴を歩んだのか一瞬でわかる。ちなみに戦術人形たちは、簡易ながらもそのコードにアクセス出来る。指揮官のなりすまし防止や、共同して指揮を取るために付けられた機能である。グローザは言われたコードを検索にかける。すると先程の言葉と一字一句同じ文章が並んでいた。ここで指揮官だと確信した。そしてすぐに敬礼し返す

どんなにボロボロでも疲弊しても人間ー特にグリフィンの指揮官

なら、礼儀を見せるのが第一なのだ。
「先程の無線でも話した通り鉄血の偵察任務よ。それでこれが、」
そういうと自分がいた付近の土を掘りかえす。埋めていたフィルムケースを見つけ出す。静かにゆっくりと土を払い、じっくりとケースを見る。傷は無く、目立った外傷もない。グローザは掘り起こしたフィルムケースを指揮官の手に移した。
「偵察結果。作戦は成功したけどメンバーは私以外全滅。そしてその私もご覧のザマよ……」
フッと軽くため息をつく。指揮官は彼女の右肩に手を置く。
「生きてるだけで充分さ。それでどれくらい歩ける？車まで５００メートルあるが」
指揮官は励ますようにグローザに話しかける。グローザは質問に答えるために簡易的なスキャンを行った。足回りが壊れてるのは事実。だが憶測では話せないと思った。スキャンが完了すると指揮官に報告した。
「関節部に異常あり、酷使しすぎてフレームが擦り切れてるわね。それと同じ理由で金属疲労を起こしてる。走るのは遠慮させてもらえるかしら？」
「なるほど、歩きは？」
「歩く程度なら問題ないわね。ただそんなに早く歩けないわよ？」
指揮官はそこまで聞くと自分の肩を貸そうとしていた。グローザはそれに気づき、指揮官の肩を借りた。
「問題ない。エスコートなら任せてくれ」
その発言にクスッと笑うグローザ。対照的に「キモい」と野次を飛ばすＡＡ―１２。グローザは指揮官に微笑み返すと、
「エスコートは初めてかしら？丁重にお願いするわ。なんだってレディーですもの」
と自信満々に答える。指揮官を笑わしたグローザは微笑む。そして指揮官は覚悟を決めたのか、頭部に付けてあるバイザーを降ろした。真一文字の覗き穴が威圧感を増す。
「了解。こちら、デルタ1、対処をエスコートする。各員援護を頼む」

『指揮官くん～了解！』
『あいよ、後ろは任せてくれ』
『了解しました。後方から火力支援します』
『こちらコブラ、ビンゴ軍用機の残燃料が帰投できるギリギリの量になったこと！今すぐ帰投するわ」
「了解した。各員、支援を頼む。マジックは道案内を」
『了解、最短ルートをそちらに送信した。コブラは帰還を。各隊員は支援を』
　展開してる部隊から続々と連絡が入る。指揮官たちも移動を始める。するとＡＡ―１２が何か思い出したのか指揮官に質問した。
「そういえばさ、それって周囲見えんの？」
　確かにバイザーの防御力は高い。確かに銃弾を数発程度であるが耐えることができる。その代わり視界は制限される。指揮官は間を空けると独り言のように呟いた。
「背に腹はかえられぬ」
　その一言を聞いたＡＡ―１２は深いため息をつき、
「ほんと、うちの指揮官ってバカだよね」
　と痛烈に言い放った。
「よしっＴＥＣ―９！ここから移動して指揮官を援護するぞ！」
　ＰＭ―９は右太腿に取り付けてあるマガジンを取り出しリロードを行う。明るく勇ましい姿と対照的に、常に心配しおどおどしてるＴＥＣ―９は頷いた。そして消え入るような声で返事をした。
「了解しました……ふぅ、やっと帰れますね」
「まぁな。けど気を引き締めないと。帰るまでが遠足っていうしな」
「はい、そうですね。もしかしたら敵がワラワラと向かってくるかもしれませんね」
　その嫌な予想は的中した。茂みが揺れ、鉄血の群れが行進してくるのを感じた。前列はガード、後列はヴェスビドとリッパー、幸いにも人数は約２０体。また服装や武装も焼けこげており動きは鈍い。そんな鉄血の群れを見つけたＴＥＣ―９は目を丸くした。そして口を大きく開け、叫ぶように報告した。

「て、鉄血です！応戦を！」
「あいよ、これでも食いやがれ！」
９㎜パラベラム弾の雨が鉄血に降り注ぐ。カードの盾もこの攻撃には防ぎきれず、後方の鉄血にも降りかかる。カードの頭部は配線や部品があらわになる。更に胴体が穴だらけになる者も現れた。しかし物量には勝てない。ジリジリと攻めてくる。その群れは歩みを止めず、仲間の亡骸を踏み越え近寄ってくる。その光景にＰＭ―９は悪態をついた。
「クソ……まだやってくるのか」
ＰＭ―９が次のマガジンを取り出している。その傍ら、ＴＥＣ―９はトマホークを持ち出した。バイキングのように左右の手で握っていた。
「ＰＭ―９さん、援護を。私が切り込んできます」
「ＯＫ、任せな」
ＴＥＣ―９は背を低くしガードに突っ込んでいく。左手に握ったトマホークを１体のガードに向かって投げる。頭部へ流れるように弧を描く。重々しい一撃が頭部に被弾し、そのまま地面に倒れる。空いている左手にＴＥＣ―９を装備する。低い姿勢のまま２体目のガードに向かう。流れるように首元へトマホークを刺し込む。頭部と胴体に繋がる配線を切られたガードは腕をだらんと伸ばした。そして持っている盾と銃を地面に落とし崩れた。３体目のガードは盾をＴＥＣ―９に近づけた。盾とトマホークの距離を狭くし追撃を防ごうとしたのだ。しかしその盾の合間を縫うように、胴体に銃を突きつける。目と鼻の距離、返り血を浴びそうだがそのままトリガーを引く。残弾は２０発ほど。本来ＴＥＣ―９はセミオートである。しかし安価でお手軽にフルオートに改造出来るため、彼女の銃もその改造を施していたのだ。軽く弾けるような音と共に、ガードの胴体に風穴が空く。いくらガードといえど生身に対し至近距離による攻撃は、装甲が厚いとされるガードですら耐えられなかった。９ミリの雨を浴びたガードは腑抜けたようにその場に倒れる。ＴＥＣ―９は攻撃を警戒しトマホークを構えたが、後方の敵は反撃してこない。後方に陣

取っていた鉄血達の頭には風穴が空いていた。全てＰＭ―９が処理したのだ。ＰＭ―９は構えていた銃を下げＴＥＣ―９に近寄る。
「よくやったな。指揮官も喜ぶぞ」
　そう言うと我が子のようにＴＥＣ―９の頭を撫でる。撫でられるＴＥＣ―９は驚きと恥ずかしさが混ざったような顔をした。そして恐る恐る口を開けた。
「あの……返り血とかついてます？」
「返り血……？あぁ、目元にな。ちょっと待ってくれ……」
　ＰＭ―９はＴＥＣ―９の目元についてた返り血を人差し指で拭った。黄色い手袋に乾いた鮮血がこびりつく。ＴＥＣ―９にそれを見せると「ヒィッ！」と悲鳴を上げ体が萎縮した。数秒後我を取り戻した彼女はぺこりと体を曲げ御礼をした。
「あ、ありがとうございます……自分じゃ拭けないので……」
「大丈夫、これくらいなんともないからさ。それよりもここから撤退するか」
「はい！そうしましょう」
　２人は鉄血の残骸を後にし撤退を開始した。
　時を同じくして
「ねぇ、Ｋ１１？榴弾まだなの？」
　ＳＩＧ　ＭＣＸは辺りを見渡す。こちらも襲撃を受けていた。しかし森林のせいで向こうが見えず、数や種類が未だに不明なのだ。ＳＩＧ　ＭＣＸは試しに向こうの木々の合間に数発撃ち込んだ。すると１０倍になって返ってくる。ＳＩＧ　ＭＣＸは木の後ろに隠れると、発砲元がどこか観察した。そしてじっと寝てるように静かに見つめていると、襲撃者が何者か判明した。プラウラーを盾にヴェスピドとリッパーが前進し、後方にはイェーガーが辺りを捜索していた。またプラウラーの他にもダイナーゲートが数体、先行していた。プラウラーと共に行動してるため歩調は同じくらいだった。早く片付けたい……そう思っていると左肩を叩かれる。振り向くとＫ１１がグレネードランチャーの弾を２発持っていた。その顔は玩具を買ってもらった子供のような顔をしていた。

「へへ、どれがいいか迷っててさ」
「ふ～ん。なら相手にとって、忘れないほど刺激的な一杯を鉄血に奢ってくれない？」
「ＯＫ、それじゃこれにすっか」
そう言うと、弾頭が赤く塗られている方を装填する。見るからに危険物だと分かるような色だった。それを手際よく装填すると、ＳＩＧ　ＭＣＸに着弾地点の指示を仰いだ。ＳＩＧ　ＭＣＸが人差し指で突くように指示を出す。Ｋ１１はＳＩＧ　ＭＣＸが指したところに照準を合わせた。そして
「どーーーん！たまやーーー!!」
の掛け声と共に榴弾が発射される。ポンと軽く炸裂する音が鳴った。その数秒後、轟音と爆風が２人を襲う。爆風により髪が揺れ、轟音のせいで周りの音が聞こえにくくなった。爆発の威力は相当なもので、鉄血の手と思われる部品が足元に飛んできた。
「……ちょっと炸薬盛りすぎたかもな」
Ｋ１１は撃った先をみてボソッと呟いた。それを聞いたＳＩＧ　ＭＣＸはＫ１１の方を振り向き頷いた。
「確かに盛りすぎよ。ＡＵＧ大丈夫かしら」
「あいつなら平気……だと思う」
２人は木陰に隠れながら鉄血の行進を迎え撃った。
ＡＵＧは１人耐熱と耐爆を施している迷彩のマントを被っており、茂みに隠れ木をうかがっていた。片腕、片足を失った鉄血達がゾロゾロと行進するのをじっと見つめてる。息を殺し、観察するついでにサプレッサーをつける。列が最後尾になるとゆっくりと立ち上がりマントを脱ぎ、そして最後尾から鉄血を襲撃した。その静かな暗殺者は手際よく頭部に銃弾を当て、最も近い鉄血から順に各個撃破する。鉄血の銃声が皮肉も彼女の足音をかき消す。後ろを振り返るリッパーを見つけると、左手で髪の毛を掴み木に殴るようにして押し付ける。その衝撃でリッパーは武器を落としてしまう。必死に左腕を離そうと両手を絡ませる。しかし無慈悲にも眉間に銃口が置かれ、曇った銃声と共に亡骸となる。そして周りを見渡し、鉄血にまだバレてないと

分かると狩りを再開した。
　挟み撃ちにあった鉄血達はどんどんと数が減り、とうとう誰もいなくなった。静まり返る中、鉄血の残骸からゆっくりと散歩するように歩いてくるＡＵＧを見て２人は安堵した。
「ＡＵＧ、怪我は無いか？あたしの榴弾、炸薬盛りすぎたからさ……」
「いえ、怪我はありません。とても良い榴弾でしたわ」
　そう言うとＡＵＧはスカートの丈をぽんぽんと叩く。埃や灰が舞い上がるが、マントを着ていたお陰で目立った外傷は無かった。
「あのマントが焦げたくらいですわ」
　ＡＵＧはまるで玩具の人形のように、表情を一切変えずに受け答えしたｏｒ答えた。一方のＫ１１は、コメディアンのように忙しく表情を変え、その返事を聞いた時にふぅと一息つき微笑んだ。
「そいつはよかった。あたしの発明で味方を傷つけたくはないからな」
「ありがとうございます」
　そんな当たり障りのない会話をしてるとＳＩＧ　ＭＣＸが２人を呼んだ。２人は振り向くとその異様な光景に驚きを隠さずにはいられなかった。ＳＩＧ　ＭＣＸは手にダイナーゲートを抱えていた。付近には、彼女が撃ったと思われるテーザーガンのカートリッジが転がっていた。高電圧で回路がショートしたのだろうか、手足を伸ばしきっていた。
「何だそれ」
「何って、ダイナーゲートだよ。指揮官くんが欲しいって言ってたからさ」
「うちの指揮官って変人だよな……」
「えぇ、私も指揮官さんの考えてことは分かりませんわ」
「あたしも分かんないのよ。指揮官くん、ペットショップでも開くのかな？」
　そんなたわいも無い話をする。そして撤退の連絡を聞き撤退を開始する。ふとＫ１１は後ろを振り返ると右手の親指を立てた。それは、ＳＩＧ　ＭＣＸやＡＵＧに向けられたものではなかった。離れた

位置にいたＴ―５０００はスコープ越しにそのハンドサインを確認すると、自信満々に微笑んだ。
一方、Ｋ１１達が戦闘を開始した頃
Ｔ―５０００とＭ２００はＫ１１達の援護をしていた。具体的には、イェーガーやジャガーといった後方にいる鉄血を狙撃する。アサルトライフルでは届かない距離のため、ライフルである彼女達の出番なのだ。確認できたイェーガーは５体。Ｔ―５０００は頭に照準を合わせると引き金を引く。数秒後、頭部の一部が破裂し部品や配線が飛び散ると、同時に後頭部から倒れる。それを確認するとボルトを引き、次弾を給弾する。空薬莢が落ちるのと同時に次のイェーガーに狙いを定める。自身が狙われているとは知らないイェーガーはこちらに銃口を向けていない。Ｍ２００と共に狙撃し最後の１人となった。最後の１人になってもイェーガーは狙撃を続ける。Ｔ―５０００は最後のイェーガーに狙いを定める。
「我が命を懸けて……仲間を守ってみせる！」
そう呟いたＴ―５０００は最後のイェーガーに照準を合わせ引き金を引いた。パーツや配線が吹き飛ぶ。致命傷を負ったイェーガーはそのまま地面に倒れていった。ふぅと一息つきながらボルトを引く。それを横目にＭ２００は、間を置いて質問した。
「さっきのセリフ、特撮ですか？」
思わず口にしてしまったと知り、恥ずかしさで赤面した。目を丸くし頬も赤くなった。
「そ、その……迷惑でしたか……？」
語尾も所々裏返りてんやわんやしていた。脳内は軽くパニック状態である。一方のＭ２００は落ち着いていた。そしてゆっくりと口を開いた。
「いえ、ボクも何か熱中する趣味が持てたらなぁと……」
そうしみじみと言うＭ２００。その姿を見ていたＴ―５０００はだんだん落ち着きを取り戻すと、どこか物悲しそうなＭ２００の肩に手を置く。
「Ｍ２００さんならすぐに見つかりますよ」

Ｔ―５０００は微笑みＭ２００を慰める。その表情を見たＭ２００はニコッと笑みを見せてくれた。その数秒後２人の無線機からＳＩＧ　ＭＣＸからの報告が入った。
『２人ともお疲れ様。後ろからの援護ありがとうね。帰ったらワンゲーム、いかが？』
「すみません、報告書を書かないといけないので見送らせていただきます」
「私も装備の調整があるので……すみません」
２人からＮＯと言われたＳＩＧ　ＭＣＸは残念そうに、
『そっかぁ。それじゃまた後でね』
と言って無線を切った。ＳＩＧ　ＭＣＸがＫ１１達と合流するところをスコープ越しに確認する。３人が談話し撤退を始める。その時Ｋ１１がこちらに振り返る。そして親指をこちらに見せるように立てる。そのジェスチャーを見て、Ｔ―５０００は微笑んでいた。守る仲間が生存していること。それは彼女達にとって掛け替えのないものだった。仲間からの感謝なら尚更だ。
突然後ろから肩を叩かれる。２人はほぼ同時に振り返る。するとモンドドラゴンがしゃがみながら、
「指揮官様からの連絡です。撤退を開始してください」
と手短に伝えられた。２人もその連絡を聞き機材を回収し始める。モントドラゴンはその２人の姿を見ながら、追加で話し始める。
「辺りの安全は確認は出来ました。それと殿（しんがり）は私に任せてください」
彼女自身、護身術や体術に長けている。そのため、不意の接近戦にも対応出来るため頼りにされているのだ。Ｔ―５０００とＭ２００は自身の銃と機材を背負い撤退を開始する。その際、モントドラゴンに感謝の言葉を伝え軽くお礼をする。素早く撤退した２人に対し、モントドラゴンはその場にしゃがむ。周囲をゆっくり見渡す。そして付近の安全を確認すると、音を立てないように時間をかけてゆっくりと立ち上がる。そのあと２人の後を追った。
指揮官とグローザは鉄血の襲撃を避けながら脱出ポイントに移動した。その間、鉄血から銃撃があったがＡＡ―１２が盾となり時間を

稼ぐ。また撤退を始めた部隊たちも指揮官の時間を稼いだ。その間にも2人は歩みを止めなかった。３０分後、目的地と思われるところまで移動した。森の入り口のところには戦術人形とハンヴィーが待機していた。さらに様々な戦術人形たちが待機しており、銃種はもちろんのこと、ローエンドの人形達から入手しづらいハイエンドの人形までおり統一感がまるで無いように思えた。

「指揮官！こっち！」

先頭にいたハンヴィーの窓からグリズリーが身を乗り出し、そして大きく手を振っていた。ハンディーの車載銃架上には備え付けのＭ２ＨＢ重機関銃と共に、戦術人形であるＭ２ＨＢも一緒にいた。普通の車載武装と違うのは2丁あることだろう。正直これではオーバーキルすぎるのと、弾薬の消費が激しすぎる。もちろんグローザはそれについて指揮官に質問した。指揮官は間を置いた。そしてＡＡ―１２にバイザーの有能性を疑問視された時と同じような受け答えをした。

「俺のロマン」

そう言われた時、グローザは乾いたため息をついた。この指揮官の考えてることは全く分からない、そうつくづく感じた。グリズリーが乗ってるハンヴィーに近づくと、操縦席のドアを開ける。次に後部座席のドアも開ける。そしてグローザを抱え、後部座席に座らせる。ＡＡ―１２には後部座席に乗るよう指示をした。そして指揮官は操縦席に座ると、エンジンをかけた。側にいたグリズリーは、

「ルートはこれ。この道なら安全だってマジックが」

「了解。Ｍ２ＨＢ！援護頼む！」

「了解～♪どんな敵も八つ裂きにするわ！」

そう言うと車載武装のＭ２ＨＢをコッキングする。カチャと重厚感がある音が響く。そのあとアクセルをふかし、ハンヴィーは唸りをあげ移動し始めた。待機していた人形達も乗ってきたハンヴィーに乗り、後を付けるように追ってきた。

「デルタ1からマジックへ、グローザを確保。これより撤退する」

『こちらマジック。了解した、そのまま撤退を開始せよ』

そしてハンヴィーの車列は激戦区を後にした。

1―3

ハンヴィーに揺られ数十分。戦場となった森林から抜けると、平和で殺風景な風景が続いた。等間隔で木々が生えており、未舗装の道路を走っていた。道なりに走ってると、拠点らしき所へ向かっていることが分かった。窓から見える範囲で判明してる事は少ないが、通常のグリフィンの拠点より重武装で大きかった。正門の左右には戦艦の砲塔とも思えるタレットがこちらを見ていた。恐らく今乗ってるハンヴィーのような装甲車なら、スクラップになるだろう。正門は開いていたが、数人の戦術人形と武装した生身の兵士が見張りをしていた。それを見た指揮官はハンヴィーのスピードをゆっくり落としていった。完全に止まると2人の戦術人形がこちらに向かって来た。ＶＳＫ―９４がハンヴィーの窓をコンコンと叩き、窓を開けるように指示を出した。もう1人のスーパーショーティーは、こちらの様子を疑うように窓越しに見ようとしていた。しかし背が足りず、必死に背伸びをしていた。ＶＳＫと指揮官の会話が終わる。ハンヴィーはゆったりとした速度で再び動き始めた。そこで見た景色にも驚いた。グリフィンもＰＭＣである以上、軍隊のような兵舎、監視塔、ヘリーポート、訓練場と言った施設を完備していることが多い。しかしあくまでもＰＭＣであるため、兵舎や司令部、監視塔、ランディングゾーンといった必要最低限のものしかない。また兵舎の多くはプレハブと言った即座に撤退出来るようになっているものが多かった。しかしこの基地はそうでは無かった。司令部のそばには大きなパラボラアンテナのような施設が隣に建っており、更に小規模ながら発電所のような施設もある。固定機銃が備え付けられた監視塔や、歩哨のための宿舎さえ建てられていた。司令部の周りには、先程援護してくれたＶＴＯＬ機や移動に使ったハンヴィーが所狭しに止められていた。またグリフィン以外の職員がパトロールしており、ＢＭＰ―Ｔと兵士数人が低速で巡回していた。ＰＭＣにしては大規模で、かなり重武装で軍のような拠点だった。

その景色を見ていたグローザは、

「まるで正規軍の拠点ね……」
と独り言のように呟いた。それを指揮官は聞いていたのか、
「ここは元々軍事基地だからな」
と返答した。
「どういうこと？」
その一言にグローザは食いついた。指揮官に代わって口を開いたのは、グリズリーだった。
「ここは元々、軍の前哨基地だったのよ。ただ、鉄血の波状攻撃を受けてしまってね。そして壊滅寸前だったわけ」
そう言うとグリズリーは指揮官を指差した。
「ここでグリフィンの出番。グリフィンと軍が協力しましょうって言う協定を結んだ、というところね」
と、歯切れが悪そうな言い方で終わる。グローザは「もうちょっと話すことがあるでしょ」と突っ込む。それを聞いたグリズリーは苦笑いをすると、
「本当は全然話し足りないんだけど、もう時間が来ちゃってね……」
そう言うのと同時に車が司令部らしきところに停車する。ふつうグリフィンの司令部は一般的なビルのように直方体で、特徴がないのが特徴なのだ。万が一襲撃に遭った時、どれが司令部なのか判別できない様にするためである。ただこの司令部は、それらとは少し違ったデザインだった。まずバルコニーのような外に出るスペースがあるという点。次に3階建てで少し小ぶりな点について。いくら地下に施設があると言っても、関連する訓練等の施設を含めると5階建てだったりかなり広大だったりするのが普通なのだ。しかしこの拠点は商業スペースのビルのような大きさだった。馴染み深いようで、そうではない。そんなグローザの違和感をよそに、指揮官は車を降りる。そしてグリズリーに、「駐車お願い」と頼み1人外に出た。グリズリーの発言をもとに自分も下車するであろう、と感じたグローザも司令部前で下車する。
司令部の中、特に人形達を指揮するエリアはグローザの見慣れたものだった。地図を広げても置けるよう広い机が設置してある。この

机はホログラムによってリアルタイムに部隊の動きがわかるものだ。またホワイトボードのような電子ボードも設置してある。これは机に比べ、部隊の状態や地形についてを事細かに表示できる。部屋は広いように見えて、様々な機器が所狭しと置いてある。部屋にはすでに２人の職員らしき人物がいた。

１人は男性で歳は３０歳後半。後方支援を主にしているのか、姿は長袖のワイシャツに黒のズボンとデスクワークを思わせるほど軽装だった。頭には髪と同じ黒のヘッドセットを装着しており、口元には黒のマイク部分が近い位置にあった。仕事がもう済んだのか、椅子に座りながら会話していた。

会話相手である２人目は女性で金髪のショートヘア。航空機のパイロットを思わせるヘルメットを腰と腕で挟むようにして持ち、１９年代後半の海軍パイロットを思わせる、可憐で派手な刺繍を施した革ジャンを着ていた。２人ともこちらに気づくと一声かけてきた。

「お疲れ様です、ヘンリー指揮官。報告まで時間がありますので休憩しても大丈夫かと」

「お疲れ～後でビールよろしくね」

礼儀正しくハキハキと常に敬意を払う男性と、どこか明るく誰とでも打ち解けるよつな女性。グローザは心の中でデジャブを感じた。

「この声……どこかで」と。彼女の疑問を感じ取ったのか指揮官は男性に視線をあわせた。

「こちらは”マジック”。ここのオペレーターを担当している。俺が不在な時は代理で指揮官をすることにもなってる」

一通り説明が終わると、マジックは敬礼をした。

「マジックです。先程の無線を担当していたのは私です」

そういうと一礼し椅子に座る。一方のコブラという女性は敬礼をしながらニコリと笑った。

「私はコブラ。もちろんコードネームよ、よろしくねエリートさん♪」

コブラというパイロットはグローザに歩み寄った。そしてグローザの手を掴み取ると、手をぎゅっと包み込むように握手をした。グローザは無線から聞こえた声の主を確認して納得した。しかし同時

に、彼女はその軍人らしくない雰囲気と態度に困惑した。一言でまとめると、人懐こいのだ。彼女は、職業軍人とはドライなものだと考えていた。そんな一方的に仲良く握手されている状況を見かねた指揮官は、存在を示すように咳き込んだ。それに気づいたコブラは慌てて手を引っ込めた。

「いきなりでごめんなさいね。久しぶりの来客だからつい……」

顔と頬を赤らめモジモジと素早く後ろに下がる。表情からして『やらかした』と、心の吹き出しが見えるようだった。まじまじと見つめるグローザと照れてしまったコブラの2人は黙り込み、それはすぐに「話しかけてもいいのか？」と疑問符を生む。つまりお互い沈黙してしまったのだ。その沈黙を破ったのはマジックだった。

「ヘンリー、そろそろ定時連絡の時間じゃないか？」

その一言を聞いた途端、指揮官は目を見開いた。何か忘れていたことを思い出したような表情だった。

「しまった、もうそんな時間か！」

グローザを救助した時の冷静でクールなのと違い、少し焦りが焦っていた。

「また、何か言われるな。そうだ、グローザを一緒に連れて行くのはありかな？」

「連れて行かないとまずいでしょう。他の指揮官と連絡を取る必要がありますし」

「そうだよな。ありがとう、報告の時間になるまでここを紹介するか」

マジックとの会話を終えた指揮官は、グローザの方を見つめる。そして肩をポンと叩く。

「……それでバーにでも連れて行くのかしら」

グローザの冗談に一笑すると、

「まぁそんなところだ」

当たり障りのない回答にむすっと顔を歪める。

「ハッキリと答えなさい」

単刀直入な一言に指揮官の顔は困惑の色を見せる。その様子を見て面白いと思ってニヤけてるコブラと、そんなことを梅雨も知らずに

淡々と仕事しているマジックを横目に置いて。
「……実際見た方が早い」
「論より証拠ってやつかしら。いいわね」
グローザは指揮官の手を握った。
「それじゃぁ、案内お願い出来るかしら？」
「喜んで」
指揮官とグローザはエレベーターの近くにたどり着いた。既にボタンが押されてたのか、数秒後エレベーターの扉が静かに開いた。中は、２０人乗り込んでも余裕がありそうな広さであり、それとは別に数人しか乗れないエレベーターもあることも後に知った。グローザ達はそのエレベーターに乗り込む。グローザが中に入ることを確認すると指揮官はボタンを押した。すると、エレベーターは搭乗者に分かるほどの駆動音を響かせて下へと降りていった。速度はかなり速く、地面に体を押さえつけられてるように感じた。その間２人は一言も喋らなかったせいか、場の空気は気軽に話しかける様子では無かった。そんな空気を、エレベーターの到着音が打ち破った。９０年代を思わせるベルの音と共に、ゆっくりと扉がスライドする。徐々に明らかになる世界の景色にグローザの目がどんどん輝いて行く。全て明らかになると、彼女は誰かに操られたかのように自然と前へ歩き、その世界を見渡していた。
駅の構内を思わせるような広さで、様々な人が出入りしていた。グリフィンの職員や軍の兵士、戦術人形や民間業者とも思える人すら行き来している。その様子を見ていたグローザはしばらくの間、口を開くことは出来なかった。
「うちの基地はかなり特殊でね、こういうことが日常茶飯事なんだ」
呆気に取られていたグローザは、その一言を聞いた途端我に帰った。
「でも、普通の基地と同じなんでしょ？」
「所々違う。紹介したいんだが時間がなくてな。」
「ええ、分かってる。遅刻するんでしょ？」
「……ブルータス、お前もか」

指揮官はボソッと呟いた。
指揮官に連れられ、グローザはとある部屋に入った。そこではグリフィンの職員と思わしき者が、壁に据えつけてあるパソコンのようなものと向き合っていた。静かな空間にタイプ音だけが響く。明かりは非常に明るかったりだれが何処にいるのか一目で分かる。部屋の中心には大きなホログラムを映し出せるテーブルが備え付けられていた。異様に静かな空間へと足を踏み入れたグローザは少し緊張していた。これからどうなるのか、不明点の多さが不安を掻き立てた。1～2分くらい待っているとピコン！と独特の電子音が鳴り、天井から格納されていたスクリーンが現れる。電源が付くと砂嵐から一転し人影が写し出される。だが、その人影は全体的に暗い影がかかり、表情や服装さえ判別できないほどだった。はじめは訝しく感じたグローザも、その動じない様子から意図的なものだ、と察した。数秒後、人影が手元のマイクを操作し、マイクの電源が入ると相手側の周囲の雑音が聞こえてくる。
「やぁ、指揮官。今日は時間通りに来たな」
その声は静かで威厳のある一声だった。聞き心地が良く、耳から脳へすんなりと入ってくる。その一方で誰しもが話すことをやめてしまうほど威圧的だった。思わず萎縮してしまいそうだった。そうならなかったのは指揮官の返答が原因である。
「たかが2分程度だっただろ」
愚　痴とも取れる独り言を聞いたグローザは呆れてしまった。そんな愚痴を無視してその人物は話し続ける。
「まずは本救助作戦、協力してもらい感謝している」
そして人影がモゾっと動く。
「そして我が基地へようこそ。君の指揮官とは連絡を取って明日受け渡すことになっている」
淡々と予定を話す男に対しグローザは口を開いた。
「ご配慮ありがとう。まず、あなたは誰なの？」
「すまない自己紹介がまだだった……私は”代表”だ」
「代表ね……本名は明かせないのかしら」

グローザは詰め寄る。威圧感があり、尋問しているようにも見える。しかし、代表と言った男はそんな態度にも動じなかった。
「すまないがそれは無理な話だ。私はここのトップでもあり軍の上層部の一員だから」
「そもそもここにいる軍隊は何者なの？新ソ連の正規軍では無さそうね」
グローザは質問し続ける。そこから沈黙が続く。
「……君のためにここの基地を説明しよう。もちろん洗いざらい全てをだ」
「まずここは軍の前哨基地だった」
画面にはその当時の基地が設立されたことを伝えている新聞が映し出されていた。時期は２０６２年、噂になっているＡＲ小隊の一部がエクスキューショナーを倒したという報告から数日経っていた。
「この地域は特に鉄血の攻撃が激しかった。上層部は、これ以上被害を出すと市街地が最前線となる……それはなんとしてても避けたかったのだ」
「要は襲来する鉄血の受け皿として作った。そういうわけね」
「その通りだ。しかし問題が起こった」
画面が画像から映像へと移り変わる。音声は無く画質も荒い。その映像は”正門前　監視塔”と下にテロップのようなものがあった。前方から鉄血達の群れとレーザーが飛び交う。カメラの下の方に映っている兵士達は応戦している。しかし数が多いのか、少し顔を出しては1分近く隠れていた。ふと兵士達が隠れてたバリケードが、突如赤い閃光を発し爆発した。その兵士たちのヘルメットの断片が空を飛ぶ。光線の先でマンティコアが仁王立ちで構えていた。
「それは2ヶ月前の出来事だった。鉄血の襲撃に遭い防衛戦を展開した。作戦終結までに数時間を要した」
映像が新聞紙へと変わる。タイトルは『軍は防衛に成功！』と華やかなものだった。しかし写真に写っていたのは、監視塔やバリケード、さらに装甲車などが鉄屑となって散らばっており成功と言えるのか甚だ疑問に覚える。

「防衛に成功したが、我が軍はすでにかなり消耗していた。軍は勝った気はしなかった、何故ならまた攻めてくると考えてたからだ」
「その時の兵士の質は？」
「正直言って最悪だった。武器も装備も消耗が激しかった上に士気もガタガタだった。更に車両の多くも破壊され、使えたとしてもどこか壊れていた」
　代表は一息付くと再び話し始めた。更に画像も変わる。新聞記事であり記事のタイトルは『グリフィン、軍との協定を結ぶ』だった。
「そこでグリフィンの登場だ。軍は当時、鉄血との経験があるＰＭＣはグリフィンだと聞きつけた。鉄血撲滅と戦力増強のため、グリフィンと協定を結んだ」
「内容は？」
「まず、この基地を拠点とすること。次に監視役として私と職員の一部を軍隊とすること。そして指揮官は軍関係者とすること」
「……なるほど。だから指揮官のくせに最前線に出てたのね」
　グローザは指揮官をチラッと見る。見られた指揮官は物おじせず見つめ返した。
「そういうこと。これでも元大尉だから偉いんだぞ」
「そんな見栄を張れる階級では無いはずだがな」
　すかさずツッコミを入れる代表に機嫌を悪くする。代表は再び話し始めた。
「つまり、私は彼にとって軍からのお目付け役というわけだ。彼が暴走してクーデターや反政府組織と手を組むことを恐れていたということだ」
「そんなにいちＰＭＣに何をビビってたの？」
　聞いた途端激情しそうな質問に対して、代表は一切態度を荒げることはなかった。不気味なほど冷静で常に場の空気を掌握していた。
「それほど彼にとって追い詰められていたのだ。一部の将校が『戦争博物館から兵器を持ってこよう』と提案するぐらいにな」
「なるほど……それで、他にもグリフィンと何か結んだんでしょ？」
「察しがいいな」

指揮官が横から褒めると、「当たり前じゃない」と冷たくあしらった。２人の会話が終わるのを待って代表は語り始めた。
「グリフィンは軍の任務だった治安維持と殲滅任務を遂行する代わりに、軍にちょっとした支援を要求した」
「内容は？」
「ガンシップや装甲車、迫撃砲と言った兵器や兵士・民兵等といった兵員を提供してもらうことだ。もちろんＰＭＣに武器を供与するなんて言語道断だが、クルーガー社長と私の一押しで成し遂げたことだ」
グローザは先程の一言が気になっていた。クルーガー社長……本名はベレゾヴィッチ・クルーガー。元新ソ連兵であり協力者と共にグリフィンを立ち上げた、私たちの上司に当たる人物である。そんな彼がここの基地に携わってること自体驚きなのだ。代表はそんなことを露知らず話し続ける。
「もちろん軍は制約を設けた。その制約がこうやって私が任務を伝え、指揮官自身は作戦を立案しないことだ。こうしないと予算と使用許可が降りないようにした。ちなみにだが、グリフィンと軍から支給される予算は共に５０％だ」
「つまり、コントロールしたかったということ？」
「そうなるな。と言っても今は形骸化されつつある。しかしこうやって続けるのはしきたりだそうだ。なんとも残念な話だ」
代表が愚痴をこぼす。グローザはそこに注目して質問を仕掛けた。
「グリフィンのことを信頼してるのね。どうして？」
「クルーガーとはちょっとした関係でね。昔、戦場や酒場で一緒にいた仲だ。と言ってもその後ＰＭＣを創設したとは知らなかったがな」
即答した回答に驚いてしまう。そんな過去があったとは知らなかった……唖然としてピクリとも動かない。それを見かねた代表は話の続きを再開した。
「そしてＳ０２７地区としてここは生まれ変わった。今では大御所になったが、昔はちょっとした武装勢力だった。こうして地下施設が多いのも彼（ヘンリー）のアイデアだ」
代表は一息おくと、グローザに話しかけた。

「それでだが、君の指揮官はここへ来るのにもう少し時間がかかるそうだ。私としてはこの基地へ入ることを許可したいと思うのだが、指揮官はどう思うかね？」
「別になんとも。グローザ次第なところだな」
　事がトントンと進む。その流れになんとかついていけたグローザは口角をあげる。その顔は自信に満ち溢れていた。
「もちろん、そうさせていただきますわ」
「決まりだな」
「ああ。ようこそＳ０２７地区へ」
　こうしてグローザは迎え入れられたのであった
　グローザが退出して数分後。
　指揮官と代表は２人で話し合っていた。先程いたグリフィンのスタッフは全員いなくなってた。必要最低限の薄明かりが、ぼんやりと部屋を照らしている。２人は互いに向き合い真剣な表情で話し合っていた。
「それで彼女の持ってたフィルム……どうなったんだ？」
「Ｓ０５地区の指揮官と少し話し合った。その結果グローザを安全に引き渡す代わりに、許可を承諾してくれた」
「お得意の取引か。それでどんなのだった？」
　代表はため息をついた。それは深くて暗く決して消えることは無い”負の何か”。そう暗示させるものだった。
「とりあえず見てくれ」
　画像がモニター上に映し出される。
「……クソッ。面倒臭い事になったな」
「ああ、早急に対処すべきだ」
「同感だ。すぐに軍と話がしたい。そうきに対策しないと不味いことになる」
　そこには鉄血のハイエンドであり悪名高き殺戮者ドリーマーと、同じく鉄血のハイエンドでリーダー格であるエージェントが２人で会話している写真が映し出されていたのだった……

2章　襲撃

2―1

「それでどうするわけ。この失態を埋める手立てとか考えているのかしら」
「ええ、考えてあります」
「聞かせてもらえるかしら」
　ドリーマーとエージェントはモニター越しで話し合っていた。彼女達は鉄血の中でもハイエンドで、その指揮権限もスペックに似合うモノだドリーマーは頬杖をつきながら、狂気じみた笑みを隠そうとし、一方のエージェントは頑なにその真面目な顔を崩すことはなく淡々と話していた。
「簡単な話です。付近にいるエクスキューショナーを利用します」
「簡単に言うけど、勝てる算段はあるわけ？」
　エージェントはドリーマーに自身が考えている作戦を打ち明けた。
「まず、グリフィンの基地の規模や戦力からして今回は負けるでしょう。しかし、目的はそこではありません」
「集めた情報を使い、再度戦力を整えてまた蹂躙すればいいのです」
　”蹂躙”その二言を聞いたドリーマーはニヤッと笑っていた。その笑顔の裡には、あるいは虐殺といった残酷な思惑が秘められていた。
「……何かおかしいことでも？」
「うんうん、全然違うの。あの蛆虫達を潰せると思うと気分が高まるわ」
　嬉しくなったドリーマーはクルクルと回っていた。そんな姿を見たエージェントは理解することを諦めたのか、
「そうですか」
　と冷たくあしらった。
「指揮は任せます。有象無象の集まりなので過度な期待はしてません。ただ期待に応えないような戦いをしたら…」

「分かってるわよ。まぁちょっとお高い偵察になるけど、情報収集くらいにはなるかしら」
「ええ、そこそこ戦力はあると思うので何かしらのアクションは出来るかと……それでは私はここで」
エージェントが映し出された画面が真っ黒になる。1人取り残されたドリーマーは笑っていた。ヒヒッと引き笑いが部屋にこだまする。まるで、B級映画の魔女がそうするように。
「今夜はいいショーになるかしら……」
楽しそうな独り言を呟き目を閉じる。彼女の玩具達が奏でるであろう破滅の音。それは彼女にとって大切な娯楽であり、唯一の暇潰しでもあった。
数時間後
18：25。指揮官達の会議の後、暇を持て余したグローザは自分なりに時間を潰す方法を考えた。その結果、拠点内をぶらぶらと歩き回ることにした。幸いにも「空き部屋を好きに使ってもいい」と指揮官に言われたお陰で、早々に寝床を確保し仮眠をとることができた。更にこの基地のメンテナンスルームも使用することができたため、先程まで悲鳴を上げていた関節はまるで新品のように軽々しく動き、グローザは調子が良くなっていた。あとはこの暇になった時間を潰すことくらいだが、立場上どこかに勝手に入るのは難しかったため基地周辺をブラブラと散歩することにした。地下一階、無数のドアと無機質な壁が辺り一面に広がる。あまりにも面白みが無いので寝床に帰ってそのまま過ごすか、もう一度散歩するか迷い始めた。すると、いきなり右肩の上に手がぽんと置かれた。誰なのかと後ろを振り向き確認すると、グリズリーとSIG　MUXが微笑みながら立っていた。
「グローザじゃん。どうしたの？」
グリズリーは親しみやすく微笑みながら優しく話しかけてきた。
「ええ、ちょっとグルグル回ってまして・・・」
「道に迷ったの？」
SIG　MUXが横槍を入れてくる。その目はとても輝いていた。

「えぇ……まぁそんな感じかしら……」
グローザは思わず一歩下がり、引きつってた笑顔を見せていた。ＳＩＧ　ＭＣＸの熱意は一瞬で分かるほどの勢いだった。
「つまり、あたしの出番・・・!?」
フンフンと鼻息が荒く風が服に当たる。興奮してるのは顔を見なくても分かる程だった。
「ねぇ、グローザが戸惑ってる」
「ごめ～ん。久しぶりに道案内なんてしたからさ」
「分かるけどさ、落ち着いて」
２人はグローザのことを忘れ話し合い始めた。２人の話の輪に入れず困惑していると、ＳＩＧ　ＭＵＸがそれに気づき話しかける。
「……それでどこに行きたいのかな？」
「どこかオススメなところはあるのかしら？できれば時間を潰せるところとか無いかしら」
ＳＩＧ　ＭＣＸは「ん～」と唸り首を傾け目を瞑った。そして数秒後、再び輝いてる目を見せる。人差し指を立てて明後日の方を指した。
「まず、ここをまっすぐ歩いてすぐ右に曲がるとカフェ＆バー〝ブオナ・ノッテ〟ね。時間帯的にはまだカフェだと思うよ。そしてカフェの道を直進して左折。また直線すると射撃演習場があるね。弾薬代とか無料だからストレスとかあるならオススメよ」
「へえ、結構そういう施設あるのね」
グローザはそう感嘆し、それを聞いていたＳＩＧ　ＭＵＸはうんうんと頷く。
「でしょ～。元々ここはシェルター兼作戦室だったんだよね」
「なるほど、ここも〝いわくつき〟って訳ね」
「そうね。あたし達は慣れちゃったからなんとも思ってないけど普通そう思うよね」
グリズリーはグローザ達の会話に参加した。
「シェルターってことは鉄血対策かしら？」
「まぁ、そういうこと。指揮官曰く『万が一前線基地が崩壊しても、こ

こで徹底抗戦をする』予定だったようね」
「相当苦戦していたのね」
「そういうこと。それで……　あたし達と一杯どう？」
　ＳＩＧ　ＭＵＸは食いつくようにグローザへ近づいてくる。彼女の柔らかく豊満な胸がグローザの体に近づく。胸が近づくすれすれだった。
「一緒にゲームとかでもいいんだよ？」
　グローザがどう返すか対応に困ってると、ＳＩＧ　ＭＵＸの両肩にグリズリーの手が置かれた。
「近づきすぎ。グローザがまた困ってる」
　そう言うと、ＳＩＧ　ＭＵＸを引き離しそのまま数歩後ろへ下がらせた。その時ＳＩＧ　ＭＵＸは苦笑いを浮かべていた。
「張り切りすぎなんだってば。ステイ、ステイ」
　グリズリーは子供をあやすように優しくＳＩＧ　ＭＵＸに話しかけ、肩に置いてある手をトントンとリズムよく叩いた。一連の流れを見てきたグローザはＳＩＧ　ＭＵＸの顔を見つめ、そしてほほえみ返すとＳＩＧ　ＭＵＸの手を握り返した。
「なら、１ゲームお願いできるかしら。もちろん勝ったら一杯奢ってもらえるかしら？」
　その言葉を聞いたＳＩＧ　ＭＵＸは水を得た魚のように輝いていた。
「もちろんだよ。言っておくけどあたし、かなり強いよ」
「おぉ、あたしも混ぜてよ。それで何するの？」
　３人は一箇所に集まり談笑する。その微笑ましい光景は、戦場だとは思えないものだった。だから――その平穏な空気を打ち破る轟音と破壊が訪れようとは、思いもしなかったのである。
　突如、天井からくぐもった轟音が聞こえてきた。小刻みに建物が揺れる。それが長時間続く。揺れが弱くなることはなかった。怒号と振動は比例して激しくなる。天井が揺れるとホコリが舞い落ちる。そして揺れるたびにボーンと何か爆発する音が聞こえる。不思議な状況に緊迫したサイレンが響き渡り、赤いランプがせわしなく回転し

さらに危機感を煽る。一瞬にしてカオスな空気へと変わった。
　そんな中、２人の顔に緊張が走る。
「ごめん、行かないと」
「ごめんね。ゲームはまた次回ってことで」
　２人はそう簡潔に一言話すと何処かへ行ってしまい、１人グローザだけが取り残された。辺りを忙しなく動き回る武装したグリフィン職員や軍の兵士たち、戦術人形の中からエンジニアと思われる身なりの職員を捕まえ、話しかける。
「どうなってるの。何故こんなにも忙しなく動き回ってるの？」
　男は緊迫した顔つきで、息を整えながら答えた。
「基地が襲撃されてる。鉄血が攻めてきやがった！」
　先程、ハンクと代表が話し合ってた部屋も臨戦態勢だった。オペレーター達はキーボードを素早く打ち込んでいた。ヘッドセットに付属しているマイクからは「状況報告」や「怪我人はいないか」、「被害について」など情報収集に躍起になっていた。
「クソッ！これはまずいな……」
　報告を聞いた指揮官は思わず悪態をついた。報告の内容は、正門の重タレットの配線が切断されてしまったこと。巡回していた人形及び職員が負傷、大破したこと。一部の建物が破壊されたこと。航空戦力が皆無なこと、そしてまともに使用できる防衛用の装甲車がごく僅かなことである。一部の装備は軍からの支給品のため、一旦軍に返し点検と改修を行なって再度貸し出される。そのため防衛戦力が手薄になってしまう日があるのだが、今回はそのタイミングが不幸にも重なってしまった。
「まず、負傷者と大破した人形を救助しろ。戦える者は臨戦態勢をとれ」
「軍には⊠襲撃された⊠と報告しろ。増援要請もしてくれ」
　ハンクはテキパキと各職員へ指示を出す。先程までの怠惰なハンクは、もう居なかったタイピングしていた職員の一人が振り向き、頭を前に突き出す。
「救助班、準備よし！いつでも出せます！」

救助班はＨＳ２０００、Ｍ１９１８、ＸＭ８、４式、ＰＭ―６と数名の軍人がチームを組み、地上へ上がることになった。兵士の装備は通常の防具の他、ガスマスクや対戦車携行火器といったあらゆることへ対応する準備をしていた。地上へのエレベーターは運良く生きており、砲撃があったのにもかかわらず通常どおり動いていた。揺られること数秒。その時間は短いものであったが、外の風景が全くわからず明かりはついていなかったためか、はたまたこの状況のせいなのか、長く感じてしまう程だった。エレベーターのドアが開くと生暖かい空気が全身に張り付く。いつもならひんやりとしている司令部なのにこのときは違った。一同は司令部入口まで急いだ。重装備なのにも関わらず足取りは軽かった。

「全くここに攻めてくる馬鹿は何処のどいつだ」

「鉄血しかいないでしょ。早く倒さないとマズイよ」

「ええ。それに負傷者を運ばないと。砲撃なら尚更です」

ＸＭ―８とＰＭ―６、ＨＳ２０００は端的に会話し合う。平時なら仲良くワイワイと会話する人形達も、この異常事態に対応するため神経をすり減らしていた。先程までの振動や轟音は止み、不気味なほどにまで静まり返っていた。更には先が見えにくい程暗い非常灯が危機感を煽る。駆け足で駆ける足音が反響していた。入り口まで移動するとグリーンのヘルメットを装備しているグリフィン職員と巡回兵がいた。また入り口のコンソールをいじっている兵士は軍医（メディック）だった。右二の腕に赤色の十字マークのワッペンをしている。ＸＭ―８はコンソールを弄ってる軍医に話しかけた。

「ドク！状況はどうなの！」

ドクと呼ばれた軍医はＸＭ―８の方へ振り向き話し始めた。

「ここで作業してたら砲撃が始まってな。外の状況が全く分からないんだ」

「了解。で、これ開くの？」

ＸＭ―８は降りたシャッターを叩く。固くびくともしないため曇った打撃音が鳴る。ドクは再びコンソールを見つめて操作していた。

「メイン電源がイカレてやがる。今予備電源を起動させてるから待っててくれ」
ドクはコンソールの画面をタイピングしている。電子音が響き渡る。その間一切の物音がしなかった。数分後、ピピッ！と音を立て駆動音がなり始める。
「よし、もうすぐ開くぞ」
そういったドクは地面に置いてあったＭＰ―５を拾い構えた。それを見た救助班も銃を構え始めた。シャッターは唸りを上げ外の世界へ繋がる道を作り始めた。
「クソが……酷すぎる」
外の世界を見た救助隊の一人が呟いた。そこに広がるのは地獄の光景だった。車両はガソリンのせいか天高く勢いよく燃えていた。地面は黒く焼け焦げ、砲撃の生々しい跡が至るところにある。被害はそれだけでは無かった。目に映るのは兵舎や検問所の瓦礫が大小散らばっていた。次に入り口近くに下半身がなくなったＭ１ガーランドの亡骸があった、おそらくダミーリンクだろう。そして巡回兵が装備しているヘルメットが転がっていた。炎の生暖かい風がシャッターを開けた瞬間入り込む。それはまとわり付くように吹き荒れていた。耳をすませば悲鳴と怒号が聞こえてくる。
「メディック!!助けてくれ!!!」
「誰か！Ｍ１ガーランドを運んでくれ！」
その声を聞いて動いたのはＨＳ２０００とドクだった。ＨＳ２０００はＭ１ガーランドのそばに向かった。
「これは……酷い」
Ｍ１ガーランドの左腕は吹き飛んでいた。切り口からは赤茶色の人口血液がダラダラと流れ地面に小さな赤黒い血溜まりができていた。配線などのケーブルは切れており、焼け焦げた跡が見えていた。
「今すぐ手当をします。痛くありませんか？」
ＨＳ２０００は傷口に止血帯のようなものを巻いた。これは冷却液や人口血液が漏れるのを防ぐために使用する。いわば人形版の止血帯である。

「かなり痛いです……　メンタルが焼き切れそうです」
　人形には特定の信号を感じると⊠⊠痛み⊠⊠として出力される。これは人形が自身を損傷するような行動を抑制するための一種の警告システムとして組み込まれている。自身が設定出来るわけでは無いが、外部から専用の機器を用いて感度を調節できる。ＨＳ２０００はＭ１ガーランドの首のソケットにコネクタを挿した。そして、メディカルショルダーバックからタブレットを取り出すと痛覚の項目をタップし、痛覚の感度の項目を下げる。
「今痛覚の感度を低くしています。これで感じにくいはずです。ストレッチャーを展開するので少し待っててください」
　そう言うとＨＳ２０００はＭ１ガーランドのそばを離れて背中に背負ってるストレッチャーを下ろした。背中にしょえるくらい小さく畳まれたストレッチャーを展開した。あっという間に１人分が寝れるくらいの大きさになった。付近を歩いていた救助隊の１人が近づいてきた。
「すいません、手伝ってもらえませんか」
「大丈夫だ。それよりも何処を運べばいいんだ？」
「胴体をお願いします。私は足を運ぶので」
　兵士とＨＳ２０００はＭ１ガーランドを手分けして運ぶことにした。ストレッチャーを地面に置き、ＨＳ２０００はＭ１ガーランドの関節部分を持ち上げた。胴体にまわった兵士は背中辺りに手を添え持ち上げる。あまり高くはないがストレッチャーの上へ移動するのに十分だった。素早く持ち運びストレッチャーの上へ寝かせる。上下移動すると取手を握り腰辺りまで持ち上げた。そしてあまり揺らさないように運搬を開始した。
「救助隊からの報告。負傷者多数、幸いにも死傷者はいませんでした」
　グリフィンの職員はそう告げるとハンクの方へ向いた。
『不幸中の幸いといったところか』
　大型のモニターから代表の人影が映し出されていた。電力は問題なく普段どおりの明るさを維持していた。電波の状態が悪いのかと

ころどころ雑音と砂嵐が入り込んでいた。
「まあな。ただし鉄血がこれだけで済むとは思わないと思うけどな」
『それは確かだろう。問題は次のアクションに対してどう切り返すかだ』
代表の言葉に、ハンクは胃の痛みを感じた。現状使えるカードはここにいる人形やグリフィン職員と軍の兵士たち。それと数台しか無いが運良く生きている装甲車。また司令部付近に建っている監視塔も健在であり、いつでも使用可能だった。ここまでなら選択肢が豊富なように思えるが、問題が3つあった。
1つ目は航空支援が期待できないこと。ヘリポートに待機しているヘリやガンシップは砲撃で破壊されてスクラップになっていた。軍に改修に出した分は無傷だが、物理的に距離があるため今すぐ対地支援を行うのは不可能に近いのだ。
2つ目はいつ来るのかわからない援軍だ。いくら鉄血に負けた軍とはいえ彼らは正規軍である。実際航空戦力はグリフィンも鉄血も軍にはかなり劣っていた。AC—130☒☒スプーキー（化け物）”A—10サンダーボルトをはじめとした対地攻撃機。ストライカー装甲車やBMP—T（ターミネーター）、ハンヴィーと言った装甲戦力など。もし彼らの助けがあれば小規模な襲撃隊なら容易に壊滅出来る筈だ。
3つ目は防衛陣地の損傷。正門の重タレットが沈黙しているのが悩みの種だった。あのタレットは小口径な艦砲と同程度の破壊力を備えている。マンティコアでさえ喰らえば一撃でお陀仏になるほどの火力を備えていた。また、20mm対空機関砲とZSU—23—4シルカ対空自走砲を備えた対空陣地、20mmと120mm迫撃砲を備えた迫撃砲陣地、対空ミサイルなど様々な装備や施設を保有している。しかし、それら全ての被害の規模が不明であるため安心できない。
考えを巡らせていると、レーダーに赤い点が映し出された。ポツリポツリと散らばっていたその点は、1秒ごとにだんだんと画面を侵食していった。レーダーに映し出された赤点が意味するのは1つしか無い。ハンクはホログラムテーブルの側に寄り演説するように言い

放った。
「襲撃者は鉄血だ！それもかなりの量だ！」
間を開けると先程とは比べものにならないほどの怒号を放った。
「奴らは……　我々を滅ぼす気でいる!!総員、なんとしてでも守り抜け！」

2―2

鉄血の襲撃から数十分が経過したが、その間やれることといえば防衛陣地を構築することくらいだった。既に鎮火した車両をアンカーで引っ掛けバリケードとして運用することにした。また、基地の隅には高さが１０メートルを超える監視塔が建てられており、これを利用した。幸いにも備え付けられた固定機銃は装填済みで、問題なく機能していた。この施設は辺り一面を見渡す事ができることから、ライフル人形が常に監視している。更に彼女らにはＩ．Ｏ．Ｐ製の特注で暗視スコープが配布されている。これにより、暗視ゴーグルを付ける事が出来ない人形でも暗闇に潜む敵を狙撃出来る。ダン！と力強い発砲音が暗闇に響き渡る。そのリズムは鼓動のように規則的であったものの、何処か焦りに満ちていた。

「監視塔にいるのは誰だ？」

バリケードの側にいる兵士はＰＭ―０６に聞いた。ＰＭ―０６は非常事態にも拘わらずどこか生き生きしていて、笑みを浮かべながら話し始めた。

「確かモシン・ナガンとＫａｒ―９８だったはずね。あの２人なら外すことは無いよ」

自信満々に返答するＰＭ―０６。兵士が何か言おうと口を開けたその時――バシッと空気を切り裂く音が聞こえたかと思うと、青色のレーザーが彼のヘルメットに被弾した。彼は空中に大きく足を開いた。体は宙を舞い頭から倒れた。その姿は糸が切れた操り人形だった。乱雑に叩きつけられたにも関わらず、彼の体は人形のように沈黙していた。その一部始終を見ていたＭ１９１８ＢＡＲは叫んだ。

「敵襲!!」

２０：０５　戦闘開始から４５分が経過

人形たちは引き金を引くのを止めることは無かった。それは兵士も鉄血も同じだった。青いレーザーや鉛玉が飛び交い、大小様々な爆発音が響き渡る。轟音、悲鳴、怒号、銃声。そこには破壊と暴力の限りが生まれていた。負傷した人形や兵士が出ると即座に補充兵が

やって来る。人形たちは即席のバリケードや土嚢に隠れ、一瞬のスキを突いて攻撃を行う。こそこそと動く人形たちとは対照的に鉄血は堂々としていた。まず先陣を切ったのはプラウラーやリッパー、ガード。役割は戦術人形で言うところのＳＭＧと似ている。回避能力はほとんど無い代わりに圧倒的な物量で攻め込んでくる。戦列をなし自ら防衛陣地へ進軍する。自我を持たない人形達から光線の嵐が降り注ぐ。真夜中の闇を照らす光線が行く先はバリケードだった。敵はそれだけではなかった。後方ではイェーガーやストライカーが火力支援を行っている。イェーガーから放たれる精密射撃はバリケードに隠れている兵士に対し脅威だったが、ストライカーの弾幕も脅威だ。命中率は高くないとはいえ、毎分１５００回転し長時間弾幕を張っている。もし迂闊に頭を出そうものなら被弾するのは明らかだ。

しかし人形達も反撃できないわけではない。この危機的な状況だからこそ、集中力と闘志が増す。防衛軍は鉄血を罵りながらトリガーを引いた。

ＸＭ―８は鉄血の群れを注意深く見ていた。正門は侵入者達を漏斗状に展開させることに成功している。前衛が横に広く密度が低くなっているのに対し、後衛の密度は狭くなっていた。つまり管にあたる部分にイェーガーやストライカーが密集している。そう考えた時、彼女の手は自然と動き出していた。Ｍ３２０の銃尾を左側にスイングし薬室を開放した。そして４０ミリ榴弾を手に取り銃尾から薬室へ装填した。カチャっと小さな金属音をたて開放した薬室をもとに戻す。ＸＭ―８はもう一度バリケード越しから辺りを見渡し、イェーガーやストライカーの群れが正門近くに集まっているのを目視で確認した。

「チェックメイト……！」

ＸＭ―８は角度をつけた状態で銃口を上に向ける。そしてＭ３２０のトリガーを引いた。ポン！と爆ぜる音と共に榴弾が空を舞った。弧を描き吸い込むようにイェーガーの群れに飛んでいった。ドォン！と爆音が鳴り響く。それと同時に灰色の爆風とついさっき人形だった腕や胴体、足、頭が散っていった。

鉄血に抵抗しているのはバリケード付近にいる防衛軍以外にもいた。それは司令部の屋上で射撃を行なっている人形たちだ。
ＭＧ３６は１００発の容量を誇るＣ―ｍａｇを装填しながら司令部の屋上へ伏せた。暗視スコープ越しに敵の動向と種類を探る。鉄血の群れの中にはイージスが混ざっていた。ＭＧ３６は淡々とコッキングレバーを引き、薬室にＩ．Ｏ．Ｐ製５．５６ｍｍ徹甲弾を込める。
「足掻くな。運命を受け容れろ」
古いロボットゲームのセリフを引用しトリガーを引き続ける。バババと無機質な射撃音が鳴り響き、白い硝煙と共に金色の空薬莢が勢いよく排出された。銃口の延長線上には山のように溢れていた鉄血があった。胴体に被弾したものは複数の風穴が開き崩れ落ち、頭部に当たったものは銃を地面に落とし被弾した反動で後ろに倒れた。景気良くフルオートで５．５６ミリをプレゼントしているせいで、１００発あるにも関わらずすぐに弾切れになるが、ＭＧ３６は慣れた手付きでリロードを行う。何百何千と繰り返してきた所作に、一瞬の無駄もなかった。リロードしてる最中足音を立てながら、ＭＧ３６と同じように天井に伏せた人形がもうひとり増えた。
「遅れてごめん。間に合ったかしら」
「遅いです」
隣に並んだのはＧＭ６　Ｌｙｎｘだった。ＧＭ６は重々しくコッキングレバーを引き１２．７×９９ｍｍ弾を装填し彼女らはサーマルスコープの倍率を拡大させた。鉄血の群れの中にイェーガーやニーマムなどの装甲持ちの鉄血を探し、最もバリケードに近いイェーガーを見つけると頭部に狙いをつける。
「砕けろ」
冷たく吐き捨てられた言葉をかき消すような重く荒々しい銃声と共に凶悪な一撃が放たれた。無機質な金属音と共に銃身がなめらかにそして大きく後退する。天井に転がり落ちた１２．７×９９ｍｍの空薬莢が最悪な状況を物語っていた。凶弾はイェーガーを捉えると頭部を弾き飛ばす。勢いを殺せなかった弾丸は後ろで射撃を行

なっていたヴェスピドを襲う。胴体へ被弾したヴェスピドは上下真っ二つに別れていた。配線は乱雑に切れ赤黒い人工血液が飛び散る。地面にはイェーガーの頭部と胴体、ヴェスピドの上半身と下半身が無造作に散らばった。２体は再び起き上がることは無く無価値な鉄くずと化した。屋上に登った２人はそれを顧みることなく淡々と、迷いもためらいもなく鉄血を狙い射撃していた。

即席のバリケードに隠れている防衛隊の多くは救助隊の面々が多かった。ＨＳ２０００のような医療班は司令部に退避し負傷した兵士を看護していた。時折増援として人形や重武装な兵士を派遣していたが、数が圧倒的に足りなかった。そんな時、鉄血の群れの中から高速で迫ってくるナニカを確認した。バリケードに近づくにつれシルエットがはっきりと浮かんでくる。炎の明かりで映し出された姿を見て、４式は思わず悪態をつきそうになった。それは白兵戦に特化したブルートだった。人形達から放たれる弾幕の間を機敏な足取りで回避し、圧倒的な瞬発力でバリケードへ攻め込む。そしてとうとう１人のブルートがバリケードを飛び越え侵入してきた。炎の赤い光が侵入したブルートを同じ色へ染め上げる。ブルートは獲物を見定めていた。そんな時だった。

「はぁぁぁぁ!!!!」

突如聞こえてくる絶叫とも取れる声。声の主を見つけた時には遅かった。ブルートの頭部に銃剣が食い込み、貫通して刃先が後頭部へ飛び出てた。人形の頭部も人間の頭部と同様に重大な部品が備わっている。手や腕へ指示を出す、目からの情報を整理する、人間の脳と何ら変わりは無い。頭部の配線やパーツが傷つき壊れゆく。残された力で必死に銃本体を掴み離そうとするが、どう足掻いても未来は変わることは無かった。４式は銃剣を９０度に傾けると力強く銃剣を引き抜く。ブルートの顔には大口径で撃たれたような大きな穴が空いていた。燃え盛る炎や後ろで攻撃の手を緩めない同志が見えるほどだった。致命的なダメージを負ったブルートは傷口を塞ごうと手をゆっくりと動かす。しかし頭部の重さを体が支えきれなくなっていた。後方へ下がろうとしたが、力尽きバリケードの上へ倒れる。ブ

ルートの遺体はバリケードの一員と成り果てた。そんな亡骸を見つめながら４式は呟いた。
「指揮官様を傷つける輩は決して許さないのであります……」
覚悟を決めた４式は普段は使わない左ポーチから５連装のストリッパー・グリップを取り出す。取り出した弾薬の弾頭のリングの色は黒だった。彼女が取り出したのは有坂徹甲弾。彼女の専用装備で対装甲向けにデザインされた一品である。その性能は驚くべきもので、なんと前衛のイェーガーを打ち抜き後方に陣取るニーマムを撃破する程である。それ故ここでは生産数が少なく、彼女にとってまさに切り札と言える品物だ。４式は慣れた手付きでクリップを装填する。既に通常弾が装填されているが、その上から有坂徹甲弾を装填する。
４式はなるべく縦１列に並んでいる鉄血の群れを探す。ほぼ感覚だが、長年の勘とセンスで特定する。そしてとあるガードに狙いを定め、頭部に狙いをつけ引き金を引く。ガードの頭部に穴が空き、動きが止まった。しかし弾丸の勢いは殺されることは無く後ろで攻撃している鉄血へ向かう。襲われた鉄血はガード含め５体。リッパーとイェーガーが１体、ヴェスピドが２体、全て頭部に穴が空いて沈黙した。１発１発慎重に頭部に狙いをつけトリガーを引く。そのたびに複数の鉄血がドミノ倒しのように倒れていった。５発全弾撃ちきった後には鉄血の群れは全て綺麗な鉄くずと成り果てていた。
２：０５　戦闘開始から６時間４５分経過
鉄血の群れは尽きることを知らない。津波のように流れ込み、放たれた銃弾の嵐に襲われる。鉄の暴風に襲われ亡骸になるものもいれば、腕や足を失っても抵抗するものもいた。何度も何度も、同じ光景が繰り返し映し出されていた。主の命令を忠実に遂行する人形は味方の屍を乗り越え、ただ１つの目的のため進軍する。
”殲滅せよ”
破壊、破滅、攻撃。彼女らは目標のために遂行する操り人形。道具と化したものは勝利への犠牲になるしか無い。
むせ返る硝煙。不快な轟音。耳を塞ぎたくなるような悲鳴。悪夢は人形にも人間にも等しく降り注ぐ。邪悪な悪夢に立ち向かうのは

何千何万と使っている相棒（愛銃）。そして苦楽を共に体験した戦友。絆と勇気を胸に覚めない悪夢へ立ち向かう。皆は1人のために、1人は皆のために。分隊は運命に抗おうとするダヴィデ。小銃を手に抵抗し、散っていく。

ＰＭ―０６は代わり映えがしない景色に毒ついていた。

「全くさぁ、あんた達も少しは考えたらどうなのさ」

ＰＭ―０６は的確に頭部を狙い射撃する。撃たれた鉄血は崩れ落ちるが新しい鉄血が割って入る。そういった光景を何度も見てきたＰＭ―０６は戦場に似合わないため息をついた。

「もっと笑ってよ。そしたらもっと楽に死なせてあげる」

話しても対話できない相手に話しかける。それでもトリガーを引くのをやめなかった。その時だった。大空を切り裂く轟音が鳴り響く。空から何か接近してくるのは一目瞭然だった。だんだん音が大きくなるにつれシルエットが見えてきた。

「ねぇ、あれは何かしら？」

モニターを見ていたグローザは疑問を感じていた。それは司令部の上をプロペラ航空機が悠々と飛んでいるからだ。グリフィンが保有している航空機は大きく2つ。1つは輸送用のヘリコプター。2つ目は妖精と名前がついている支援ドローン達。他にも小型輸送機があるが、配備数の少なさからあまり目にすることはない。それ故、こうして未知の航空機が空を飛ぶことなどありえないのだ。

『抵抗者達の援軍だろう』

代表はいつもどおり冷静だった。

「抵抗者って一体何者？」

「人じゃない。組織の名前だ」

ハンクからそう指摘された時、グローザは1つの仮説を立てた。

「もしかして鉄血に対抗する民兵組織がいるの？」

「もしかしなくてもだ」

レーダーから軽い電子音が聞こえた。それは、裏門から接近していた。レーダーが補足した5つの正体不明青は友軍を意味している。それも5つ確認できた。

『こちら〝リンクス〟火力支援を開始する』

リンクスと呼称されたＣＯＩＮ機は夜の空を舞っていた。使用しているのは１９６６年に開発されたセスナＯ―２スカイマスター。コードネームであるリンクスは実際に運用していた軍の呼称である。武装は左右の翼にはミサイルポッドを装備。さらに機体上部にはブローニングＭ２を２門装備。ソフトターゲットなら完膚なきに撃破できるほど重武装だ。リンクスは低空飛行になると鉄血の群れに向けて急降下し、鉄血の群れを確認するとミサイルを投射する。地上に爆音と共に大きな朱色が生まれる。その朱色に包まれた鉄血は瓦礫へと生まれ変わった。さらに生き残りの鉄血には１２．７×９９ｍｍの雨が降り注ぐ。頭部、腕部、脚部がおもちゃの人形のように簡単に弾け飛ぶ。ゆっくり堂々と旋回するとリンクスは来た道へ帰っていった。

地上ではクラクションのけたたましい音と共にエンジン音が鳴り響く。更にＤＳｈＫの低速で重々しい発砲音も加わった。思わず耳を塞ぎそうな発砲音と灰色の硝煙、時折オレンジ色のマズルフラッシュが存在感を顕にしていた。ＤＳｈＫを搭載している車両は軍用車とは程遠いものだった。どこにでもいそうな白や緑のピックアップトラック。しかし塗装が所々剥げており赤茶色のサビが目立つ。更にヘッドライトが割れており、機能してないのは明確だった。それらは到底軍の正規軍には見えなかった。テクニカルは唸りをあげ加速する。そして最前線へたどり着く。テクニカルから叫び声を上げるようなスリップ音が響き、車体は１８０度回転する。銃座が鉄血の方へ向く。銃座には人１人がすっぽりと入るような防弾板が備えられていた。防弾板にレーザー弾が当たると鈍い金属音が鳴る。レーザーは防弾板を貫通することは無く弾かれる。ＤＳｈＫの無慈悲な射撃が鉄血を襲う。１２．７×１０８ｍｍの破壊力は凄まじく、射撃を受けた鉄血達はボロボロに成り果てた。胴体は大きくえぐれ、頭部はポップコーンのように弾ける。テクニカルは３台同じように止まっており鉄血に弾幕を浴びせていた。

残りの２台は一世代古い兵員輸送車だった。バリケードより少し

離れたところで停車する。輸送車の後ろからゾロゾロと民兵が下車する。軍用規格の迷彩を着てるものや、店先で売ってそうな無個性なTシャツまで様々だった。さらに手に持っている銃も様々だった。M４A１やSCARといった軍が採用しているものが大半だったが、中にはAK７４Mといった東側製やハンティングライフルや上下２連のショットガンなど、民生品も混じっていた。

民兵は何か悪口のようなことを喚き散らすと各々発砲し始める。そしてバリケードへ向かって走る。素早くリロードを行うと再び発砲する。２５人の民兵達が放つ弾幕は圧倒的殲滅力を誇った。更にテクニカルの持続した火力が鉄血に打撃を与える。隠れコソコソしていた防衛軍は一気に活気づき、勢いついた兵士達は再び鉄血を罵り鉛玉を浴びせ続ける。押し返せる……　そう思った。

その甘い考えは一瞬で消え去った。耳を塞ぎたくなる爆発音と、火柱を上げ煌々と燃える廃車を目の前にして。前線で鉄血に１２．７mmのシャワーを浴びせていたテクニカルが、真っ二つになり跡形もなく燃えていた。２台のテクニカルは何があったのか分からず辺りを探った。

「こっちだ!このボンクラ!!」

威勢のよいかけ声と共に一筋の閃光が突如走る。金属が床に当たる甲高い不快な音が鳴り響く。その瞬間再びテクニカルが真っ二つにし火柱が上がる。そんな非現実な光景にMDRが疑問を投げかけた。

「なんでテクニカルが燃えてるのさ!自然発火なんてナンセンスでしょ!」

思わず側にいるグリズリーに愚痴をこぼす。それを聞いたグリズリーは思わず苦虫を潰した顔になった。

「MDR、さっきの声聞き覚えないの……」

「そういえば……　この声って」

「んだよ、気づかなかったのかよ」

最後のテクニカルも陥落した。銃座から操縦席まで真一文字に切られ、派手に炎上はしなかったが鉄くずとなった。テクニカルを荒ら

し回った犯人はテクニカルの屋根に登り手に持っている大剣を床に下ろした。大剣が重かったのか車体が揺れ金属が潰れる音がなった。テクニカルの炎に照らされシルエットがはっきりと見える。その姿を見た兵士たちは恐れ慄いた。

「マジかよ!」「初めて見たぞ……」「か、勝てるのか?アイツに!」

指揮官達もその姿を見て呟いた。

「まさかエクスキューショナーが指揮を取っていたのか……」

『勝てる算段はあるのか?』

代表は質問した。ハンクは首を横にふる。

「無いわけじゃないが、現実味が薄い」

ハンクは代表に話し始めた。砲撃陣地は被害が出てしまい使えない。しかし対空陣地は被害が少なくシルカが健在だ。いくら接近特化のエクスキューショナーとはいえ対空砲の弾幕には負ける。しかし問題が2点ある。

1つ目はシルカを起動し標準を合わせるまでの時間がかなりかかること。エクスキューショナーはあまり機動力は無いものの動き回るため狙いを付ける時間がどうしても必要なのだ。

2つ目は白兵戦特化の人形が少ないこと。4式や100式のように白兵戦が出来る人形もいるにはいる。しかしあの大きな獲物と互角に渡り合える人形は全くいないのだ。仮に戦ったとしても数分の猶予しか無い。流石に時間が足らなさすぎる。さらにエクスキューショナーは名誉に固執している節があり、凡百な戦術人形などでは相手にさえしてもらえない恐れもあるのだ。ハンクが話し終えたと同時に代表からタイピング音が聞こえた。

『この基地には切り札が存在する』

『第1世代のように頑丈で忠実で、第2世代のように考え動く脳を持った人形がある』

代表は昔話をするようにゆっくりと話しかける。その間にもタイピングを止めることは無かった。

『それは1．5世代といわれた。1世代より強く複雑な命令を遂行でき、自我を持ち例え指揮系統が滅んでも戦い続けるような兵器を作る

ために。しかし第２世代の完成が間近だった。そのめ軍と企業は差別化を図った』
『失われた技術（ロストテクノロジー）、重武装化、追加兵装、使い捨てロケットエンジンなど色々取り込んだ……　しかしどれもコストが高く、整備性も悪く切り札になり得なかった。軍は見切りを付けこのプロジェクトを凍結した』
　代表が写ってたモニターの景色が変わる。そこには白く無機質なロボがいた。大きさは人形と変わらない。頭部は西洋の騎士のように無個性で横に伸びている。胴体は戦闘機の先端のような、ゴツいがスッキリとした印象を受ける。肩は腕よりも大きく対照的に腕は細かった。そして背中には、増設用の装備を備え付ける為の小さな羽のような機構があった。
　胴体と下半身は黒の連結パーツは細く、そこには装甲らしい装甲は無かった。足回りは股関節は比較的大きいものの、脚部は少し細く関節パーツが見えていた。足回りにはスラスターが２基ずつ備えており第１世代の人形とは言い難い兵器がそこには映されていた。代表は静かにゆっくりと語りかけた。
『コード１０を発令する。試作機ＮＯ（ナンバーナイン）・９ホワイト（白い）・レイヴン（ワタリガラス）の使用を許可する。全ての責任は私が取る』
『全職員に告ぐ。エクスキューショナーを撃破せよ』

2―3

エクスキューショナーは辺りを見渡した。怯える兵士、なんとか勇気を振り絞った人形、恐怖を隠し誤魔化そうと必死に煽る兵士。彼女は品定めをするように、ゆっくりと舐めなわすように見ていた。そして全て見渡したエクスキューショナーは乾いたため息を吐いた。ここには戦うに値する相手はいない、と。彼女は己の実力と同等かそれ以上の相手とは戦わないと決めている。確かに戦術人形にも近接武器を持っている個体がある。しかし、銃剣だのククリナイフだの、大剣を相手にするには実力が足らなすぎる。武器も装備も貧弱な姿を見終えた彼女は愚痴を吐いた。

「弱い、弱すぎる……」

グリフィンには自分と互角に戦える人形がいると思っていた。しかし、蓋を開けてみれば虚仮威しにしか思えない戦力だらけで、理想との落差に落胆するエクスキューショナー。本来なら撤退してハンターやスケアクロウに任せる予定だった。しかし今回はドリーマーから直々に受け負った任務。戦果の一つも挙げずに撤退することなどできない。

そんな時だった。

ふと空を見渡した時、こちらに向かって何かが接近していた。幻想的な青色のスラスターの光が夜空を彩る。大きな翼が鷹を思わせる程に威厳が溢れていた。エクスキューショナーが驚愕したのはそこではない。見たことのない光景に驚きを隠せなかったのだ。その外観は、第1世代のそれと酷似していた。真っ白な、型落ちの量産機。そんな見た目の敵が、最新鋭の素体である自身と戦うのにふさわしい相手だとは理解し難かった。

接近してきたシルエットは両手を前に出し、装備していた銃を構えエクスキューショナーを狙う。軽快な発砲音と共に放たれる銃弾。エクスキューショナーは素早く相棒を構え盾にした。跳弾することを物語る軽い金属音が彼女の耳元で響く。正体不明機はスラスターを停止した。なめらかに、地面へ滑り落ちるように移動する。そして

エクスキューショナーの近くへ移動した。
「こちらホワイトレイヴン。あなたに警告します」
「は?警告だ?」
彼女にとって〝警告〟という2文字は想定の範囲外だった。そのため思わず繰り返してしまった。ホワイトレイヴンはそんなエクスキューショナーの態度にも気にせず続きを語り始める。
「貴方達、鉄血はグリフィンの領土を侵犯しています。速やかに退去してください」
ホワイトレイヴンは丁寧に、相手に不快感を与えないように警告文を読み上げた。最後まで聞いていたエクスキューショナーは高笑いしていた。
「ハハハハ!〝立ち去れ〟だと…」
彼女は大剣を掴み持ち上げるとホワイトレイヴンに向けた。刃先は人間で言うところの心臓辺りを指していた。彼女の顔には、自信と称賛の笑みが混ざっていた。
「そう簡単に立ち去れるわけがないだろ!それに貴様、強そうじゃねぇか……」
エクスキューショナーは大きく大剣を振り回し、愛銃を取り出してレイヴンの頭部に狙いを付けた。誰がどう見てもこの状況は交渉どころの話では無い。彼女の好戦的で挑発的な態度を見たレイヴンは銃を構えた。更にスラスターが唸りを上げ勢いをつける。望まない光景を目の当たりにしたレイヴンは、静かに独り言のように話し始めた。
「… どうしても、戦うしかないのですね」
レイヴンはスラスターを展開し、青色の炎が足元を照らす。その光は破壊の赤とは対照的だった。レイヴンは宙へ浮かぶと後方へ素早く退避する。エクスキューショナーは待っていたと言わんばかりにトリガーを引いた。青の光線が導かれるようにレイヴンの胴体へ吸い付く。白い装甲が剥がれ落ち黒い弾痕が生々しく胴体に傷を付ける。それを見たエクスキューショナーは残骸と化したテクニカルを踏み台にした。ガラスと金属が重い物体に潰される音を鳴らし、彼女

は飛び上がった。レイヴンと同じ高度になると彼女は持っている大剣を大きく振った。空を切る大剣の軌道は、ターゲットを一刀両断にする軌道そのものだった。だが、レイヴンは左脚部のスラスターを吹かすと華麗に大剣を躱した。推進力を失った物体の行く先は唯一つしか無い。エクスキューショナーは大剣と共に落下していく。重力に逆らうこと無く剣の重みと共に沈んでいく。しかしレイヴンは違った。重力という言葉を知らず常に空中に浮んでいる。スラスターの青い光が彼女に飛ぶ力を与えていた。重力の魔の手から逃れようと……地面に潜むおぞましい〝何か〟を避けようと……人類を脅かす悪魔に天罰を下そうと……彼女の決意は固く簡単に破れるものでは無い。彼女は今、弱き者を守るため残酷な世界に降り立った勇者なのだから。

エクスキューショナーは行動を変えた。大剣を腰に構えレイヴンを捉える。

突如、大剣に黒い霧と赤い電流が走る。それは大剣を覆い、力を与えるため剣にまとわりつく。剣が見えないほど暗く霞み赤く帯電する。そして今、それは解き放たれる。白き勇者を落とさんと闇より暗い一撃が放たれる。空間を浮遊するそれは素早く確実にレイヴンへ向かっていった。赤く光る電流が彼女の頭部へ走る。

勇者は闇に屈する事は無かった。

放たれた波動を既のところで回避する。その際、高度を維持できなくなり地面へ沈む。だがそこでも止まる事はない。氷を滑るようにエクスキューショナーの周りを旋回する。レイヴンは両手に持っている１０ｍｍ徹甲弾を装填したアサルトライフルを掃射した。銃口はエクスキューショナーの肩を捉え、肌色の人工皮膚が剥がれ落ち黒い骨格が顕になる。赤黒い人工血液と茶色のオイルが腕を伝わり、銃を持つ手を濡らす。ぬるっとした不快な感覚がエクスキューショナーを襲う。夕日のような朱色のマズルフラッシュが夜空を照らす。硝煙が機体の周りを灰色に染め上げる。大剣は軽快な金属音を立てて、弾丸が金属の雨に変わり地面に降り注ぐ。いくら機動力が高い彼女も弾幕の嵐の前では、それを発揮する機会は無かった。

弾丸の雨はいきなり止み、レイヴンは自身が装備している銃を地面へ向けた。攻撃が止んだのを皮切りにエクスキューショナーは自身の大剣をゆっくりと下ろしていった。
「貴様……どうもただのグリフィン人形じゃないな」
ゆらゆらとエクスキューショナーは、揺れる体を支えるために大剣を地面に突き刺した。硬いアスファルトのはずが海水の砂のようにすんなりと入っていった。ニヤリと笑うエクスキューショナーは語りかけるように話し続けた。
「その武器はどうも民生品じゃないな、軍用規格だろ？それにだ。型落ち人形どもがあんな飛行能力があるとは思えない」
「用件は」
レイヴンは痺れを切らしたのかエクスキューショナーに問い詰める。彼女はその言葉を待っていたのか声を上げ笑う。一通り笑うと深呼吸し話し始めた。
「つまりだな、お前は人間の犬かってことだ。違うか？」
「犬……つまりは貴方と同じ操り人形ということですか？」
「いや違うな、オレはエリザのため自分の意志で戦っている。その一方でだ、貴様はどうだ？」
エクスキューショナーは一歩二歩歩み始めた。まるでレイヴンの方へ攻め込むように。
「貴様は人間の命令に従ってるだけだろ？『人間のために死んでこい』と言われそれに従う犬……違うか？」
エクスキューショナーは大剣を突きつけ質問する。先程と比べ沈黙を貫くレイヴン。回答が出たのは数分後だった。
「違います」
「ほぉ……根拠はあるのか？」
「勿論。貴方と同じですが」
「……どういうことだ？」
機嫌が良かったエクスキューショナーだが表情を崩した。顔には怒りと疑問が入り混じっていた。レイヴンは彼女の表情を見ても一切口調を変えることは無かった。

「私は人間を守るために戦う。そう誓いました」
「何故人間を守る？」
「〝弱き者を守る〟。私はそのために戦うことを誓いました」
「ハッ、ふざけたことを言うんじゃね――え！」
レイヴンの答えに彼女はとうとう憤慨した。感情に任せ猛然と走り出すと宙高く舞い上がり、大剣を自身の力に任せ荒々しく叩きつけるような一太刀を振るう。レイヴンは持っているアサルトライフルを手放した。そしてエクスキューショナーの顔を殴るように右腕を動かした。
その行為はエクスキューショナーを殴るためでは無い。手の甲から赤く発光しショートソードのような刃が伸びる。ジリジリと金属が焦げ火柱が散っていた。レイヴンはスラスターを展開し後ろに下がる。状況が悪化したと判断したレイヴンはすかさず左手も同じように起動した。２つのエネルギーブレードが展開し臨戦態勢に入ったレイヴンは仕掛けることは無かった。レイヴンの顔はエクスキューショナーをじっと睨みつけ、その場から動くことは無かった。エクスキューショナーは拳銃を取り出し銃口をレイヴンに向けた。しかし発砲するタイミングは無いに等しかった。スラスターの噴射音と共に急速にレイヴンが攻撃を仕掛けた。
腕を胸の前でクロスした状態でエクスキューショナーに猛進した。目と鼻の先といった状況になると、交差した手を地面に向けるように下ろす。突然の攻撃に予想外だったエクスキューショナーは回避に専念するしか無かった。後方へステップするように回避する。レイヴンはそれを見逃さなかった。左手をアッパーカットするようにあげ、さらに体をねじるように地面に向けて下ろした。レイヴンの猛攻を受けひたすら回避していたが、大きく後ろへ距離を取った。先程の消極的な態度と打って変わって積極的だった。エクスキューショナーはくつくつと笑っていた。
「ハハハハ!!やっぱり貴様と戦ってると気分がいいな！」
エクスキューショナーはレイヴンを挑発するように大剣を振り回す。エクスキューショナーは両手で構え直す。その目には闘志と喜

びが溢れていた。それほどエクスキューショナーは興奮していたのだ。しかし悲しい事にレイヴンは無関心だった。
ブレードをしまいなおしエクスキューショナーを見つめていた。まるでこれ以上の戦いは無意味だと語りかけるように。
「貴方の負けです」
その一言が合図だった。
突如エクスキューショナーは光に包み込まれた。太陽のような明るさだったため、エクスキューショナーは思わず目を瞑った。一方のレイヴンはそれでも尚その場に仁王立ちしていた。だんだん明るさに慣れてきたエクスキューショナーはうっすらと目を開けた。
そこにはサーチライトを取り付けこちらを照らしている戦車がいた。しかし戦車にしては主砲と呼べるようなものは無かった。代わりに４門の機関銃がこちらを向いていた。その戦車のような車両を見てしまった彼女は、驚愕してしまい石のように固まってしまった。レイヴンはスラスターで上昇すると、その車両のとなりに並んだ。
エクスキューショナーはその姿を見て我に帰った。自分がはめられたと察したのだ。この白い人形は初めから時間稼ぎの囮であり、まんまと罠にハマってしまった。しかも戦車とエクスキューショナーには３００メートル程の差があったのだ。怒りのあまり表情が崩れる。レイヴンを睨みつけると吠えるように怒号を浴びせた。
「テメェら……オレを嵌めたのか。汚えぞ！」
するとシルカの砲身がエクスキューショナーへ狙いを付けていた。それと同時に、拡声器から流れる不快な雑音が戦場を支配した。
『だまして悪いがこれも作戦なんでな。死んでもらおう』
エクスキューショナーの罵倒は搭乗員にとってヤジとほぼ同じだった。冷たくあしらわれる。砲身はこちらを向き、これから起こる未来を告げていた。しかしエクスキューショナーはそんな運命を受け入れることはなく、抵抗する道を選択した。
エクスキューショナーは地面を蹴るように走り出した。走りは加速しどんどんと距離を詰める。小柄に見えたシルカもだんだん大きく見えてきた。エクスキューショナーは大剣を構え宙に飛ぶ準備を

していた。だがそれは叶うことは無かった。
突如こちらに小さなミサイル群が接近してきたのだ。見えている範囲で2発、それも至近距離でこちらに接近していた。エクスキューショナーのやれることはただ一つ。エクスキューショナーはミサイルに対し大剣を振りかざした。ミサイルは真っ二つに切れ、爆発と共に赤い火の玉が生まれる。灰色の爆風を掻き切るようにエクスキューショナーは這い出てきた。状況はまだ好転しなかった。2発目のミサイルがこちらへ接近してくる。幸いにも距離は離れていた。エクスキューショナーは銃を構え乱射した。幸いなことに1発目がミサイルに当たった。先程同様に丸い火の玉と轟音が生まれる。生暖かい灰色の爆風と火の粉が顔に当たる。この時、彼女はこの後起こるであろう危機に反応できていなかった。生まれた爆風がスモークグレネードと同様の働きをしたからだ。彼女は再び危機に遭遇した。目と鼻の先に接近していたミサイルに気が付かなかった。煙が去り辺りを見渡せる状態になった時、自身に降り注ぐ厄災を認識した。ミサイルは既に胴体へ向かおうとしていた。エクスキューショナーは既のところでその危機を回避した。持っていた剣を盾に使ったのだ。
剣にミサイルが当たると一際大きな破裂音と共にミサイルの残骸が散らばった。それだけではない。爆発の衝撃はエクスキューショナーの手を襲った。思わず悲鳴を上げそうな苦痛、火山が噴火したような振動。それが一気に襲ってきた。流石に接近戦特化のエクスキューショナーでさえこのダメージは許容出来なかった。とうとう自身の武器である大剣を手放してしまった。大剣は重力の魔の手に従い、金属音を立てながら地面に落ちた。一方のエクスキューショナーはミサイルを受けた反動で大きく後退した。
エクスキューショナーは震える足に力を込め、なんとか地面に立ち上がった。そして辺りを確認するため顔を上げた。そこには罪を断罪し判決を下すものが鎮座していた。シルカが装備している87.3口径23mm4連装対空機関砲は航空機の他にもソフトターゲットを相手にした。具体的にはゲリラに対し掃射を行なった。4連装から放たれる弾薬の雨はエクスキューショナーを襲った。耳を塞い

でも聞こえてくる爆音と共に、赤とオレンジ色のマズルフラッシュが激しく光った。掃射時間は約2秒ととても短かった。しかし4，000発／分から放たれた鉄の嵐はそこにいた生命体の命を刈り取った。

エクスキューショナーは無残な亡骸になり変わり、下半身だけが地に足を付け立っていた。上半身は肉食動物に分解されたように乱雑に切り裂かれ、胴体は仰向けの状態で地面に眠っていた。胸には大きな穴が空き、そこから赤い人工血液と茶色いオイルが流れ混ざりあっていた。腕は無理やり引っこ抜かれたように、切れた配線が露わになっていた。関節部に当たったのか、上腕と前腕がバラバラになって転がっていた。そして頭部はかなり悲惨である。額は、向こうが見通せるほどの大きな穴が空いていた。右目を貫通したのかえぐり取られたようになくなってる。そこには目の代わりに大きな空洞がポッカリと空いていた。

先程のミサイルはレイヴンの武装の1つである。背中に背負っている大型のブースターに小型だがミサイルランチャーがある。このミサイルは特殊な兵装である。母機から発射されたミサイルは、一定時間経過すると内蔵した3発の小型ミサイルを射出し、それぞれがターゲットに向かうというシステムである。被弾した場合、敵の装甲を破壊し内部の脆弱な機器にダメージを与える。

レイヴンはただ静かにエクスキューショナーの亡骸を見つめていた。自身がもたらした

結果とその産物を忘れないように、記憶に焼き付けるために。

ボスを失った鉄血達は混乱した。何故なら鉄血は常に命令を受けて動く存在であり、司令塔を失った彼女らは烏合の衆と成り果てた。ブルートはデタラメに突撃し、ガードはカカシのようにつったっていた。ヴェスピドとストライカーは無秩序に乱射し、狙いは定まっていなかった。イェーガーの狙撃は未だ脅威であったが正確さに欠けていた。脅威であった統率力は既に壊滅した。大きく突出した集団があれば鉛玉を浴びせ壊滅させる。

鉄血の群れは着実に数を減らされていく。例え味方の目の前でやられても、頭部を破壊されても、至近弾が着弾しようとも決して逃げ

ることは無かった。そして最後の鉄血が撃たれて残骸と化した。
先ほどまで存在したあの脅威はもういなかった。胴体や頭に銃痕が空いたものや、上半身と下半身が吹き飛んだものが辺りを埋め尽くす。鉄血は戦力は0であるのは自明の理だ。それを確認した一同は笑顔が溢れていた。その数秒後、歓喜の声が溢れかえった。空に手を突き上げる。歓喜の声を上げるものもいれば、古い軍歌を歌うものもいた。そこには1つの考えが伝播していたのだ。
我々は勝ったのだ。地獄みたいな戦場を生き延びたのだ！
戦いの結果はグリフィン側の勝利で終わった。鉄血の残党は基地から数百メートル離れた森林にいた。ジャガーがスリープ状態で主の命令を今か今かと待っていたのだ。拠点を砲撃した主犯を見つけた兵士達は即座に破壊作戦を決行した。
地下シェルターから地上に出てきた指揮官は、溢れ出る日光を浴び思わず目を細めた。久しぶりに浴びた日光は刺激的だった。辺りには残骸やオイル、人工血液と血が水溜りのように出来ており、オイル溜まりは日光を反射し激しい自己主張をしていた。戦争は終わった。しかしその戦果は決して痛みなくして得たものではなかった。死亡した兵士たちは2桁を超え、負傷兵の数はその倍以上になった。人形達も同じ程度の被害を被ったが、幸いにもメインフレームを破壊された人形は少なかったのが救いだろう。
ヘリポートではグローザを迎えに来たヘリコプターがホバリングし降下した。ローター音と風が指揮官達を襲う。ヘリポートに着陸したヘリは即座にドアを開いた。中に乗っていたのはグリフィン職員と軍のドアガンナーの2人だった。グローザは自信満々にヘリに乗り込むと指揮官に敬礼をした。指揮官も彼女が大空に上がり見えなくなるまで敬礼をし続けた。ヘリが大空を飛び去ったのを確認すると、今度は残された残骸を見つめた。
鉄血の攻撃は勢いを増す……　しかし我々は勝利を勝ち取らなければならない。それには代償が必要だ。指揮官はその代償を噛み締め胸に刻みつける。我々の戦いはこれからなのだ……

3章　エアボーン

3―1　嵐の前触れ

ハンクと代表の2人は作戦本部で話し合っていた。本部の電気は最低限しか点いておらず、薄暗く不気味な雰囲気を醸し出していた。

「先月の襲撃から鉄血の動向を追っていた工作員達からの報告だ。先週、彼らの装甲列車と貨物列車が不審な動きをしていた」

「具体的には？」

「積荷にジュピターが積んであった。それも5門だ。あと、通常の1．5倍ほど多く鉄血の素体が積まれてあったそうだ」

「偶然じゃないか？」

ハンクは代表の報告に疑問を抱いていた。確かに鉄血は貨物列車を使って物資を運搬していると聞く。しかし一部の列車は、レジスタンスグループが仕掛けた爆弾の被害にあって全く運搬出来ていないそうだ。そのため対人砲やジャミング装置などあらゆる防衛手段を用意していることが多い。

それでも爆破任務は続行し、今では2両の列車が無傷で鹵獲されているほど洗練されていた。

「今回だけたまたま数が多かったわけでは無い。ここ最近、積荷の量が増加傾向であるのは確かなのだ。それに先日のエージェントカールと指揮官達の報告によると……」

代表は資料をめくる。それと同時に画面が切り替わった。

それは暗く不鮮明なところもあったが、何が写し出されていたのかは分かった。ジュピターの砲塔と思われる部品と、起動していないストライカーが眠るように横に並んでいた。

「明らかに何処かに運ぶ予定だな……」

「ああ、カールが仕掛けたGPSによると占拠されたカタル駅に集められていた。積み荷がここに集まってるのは確かだろう」

代表は地図を映し出した。赤く丸がついている駅は、元は資材倉庫も兼ねていた軍事的に重要な駅だった。今では鉄血の手に落ちてし

まい、以前の持ち主と同じような運用をされている。
　ハンクはため息をついた。このような状況は間違いなく悪い前兆だと勘が告げていたのだ。代表は重々しく口を開け話し始めた。
「そこでだが今回の作戦は、まずこの列車の〝積荷〟になる。そして目標の駅を襲撃し、何故量が増えたのか、それを命令したのは誰かを突き止めることだ」
「待て。そのたいそうな作戦だが、戦力はどうする？グリフィンって言っても軍隊ほどの規模はないし、ましてやこの作戦に割ける軍もいないだろ？」
　ハンクの言うことは概ね正しかった。まず、現在の主力軍は都市や治安維持活動に躍起になっていた。そのためグリフィンに駐屯している軍は2個中隊程度。さらに、後方支援や本部に帰還する人数を減らすと、使えるのは1中隊程度。
　損耗を避けたい両者にとって、派遣するのにはリスクがありすぎるのだ。
　また、レジスタンスグループは防衛戦に駆けつけた〝抵抗者〟以外にも存在する。しかし人数と装備の質に難がある。未だにＡＫ―４７や火炎瓶で渡り合うような勢力である。戦力として呼ぶには少々難があるのだ。しかし代表には考えがあるようだった。
「大丈夫だ。クルーガーと連絡を取り、話し合った結果別の地区の指揮官が援軍として派遣されることになった」
「それは何処だ？まさか１０地区じゃないだろうな。あそこは精鋭と聞くが……」
「いや、８地区の人形達が派遣されることに決定した」
　代表は椅子にもたれかかると、手元にあった水の入ったコップを手に取った。カランと氷がぶつかる音がモニター越しから響く。代表はハンクの目も気にせず一杯飲む。そして古い友人を思い出すように語り始めた。
「名前は……『ギムレット』
　・会議から2時間後

ギムレットと呼ばれる人形ことＭ２００とＳＡＦは地下に向かうエレベーターに乗っていた。それに加えて２人の兵士が護衛として同行していた。同行していた兵士は２人ともＭ４を所持しており、素顔がわからないように目出し帽を被っていた。

１人は階層を操作するパネルの前に、もう１人はドアの前に立っていた。兵士以外の搭乗者は人形達だった。グリフィンでもお馴染みであるＭ２００とＳＡＦは兵士の後ろに固まって立っていた。見慣れない姿と場所が原因ですっかりと萎縮してしまう２人。彼女らと比べ１人、興味津々に話しかける人形が１人いた。

「このエレベーター、何処に向かってるの？話してもいいじゃない、お互い仲間なんだからさ」

その人物は戦術人形の中でも一際目立つ見た目をしていた。

深海のように深い青色のショートヘア。目も同じように青かった。その髪と目を強調するようなあまり目立たない紺色のスーツ。

グリフィンの戦術人形なら当然のように持っている銃は、どこにも見当たらなかった。代わりに鉄血が所持していそうなレーザーライフルとハンドガンを装備していた。話しかけられた兵士は答えた。

「残念ながら、それは機密事項なのでお答えすることは出来ません。ましてや、グリフィンの人形でも無いのなら尚更です」

「それ、３回目よね？　あなたてば人間なのに、私たちよりよっぽど機械らしいよね」

青髪の人形はつまらなそうに反応した。

Ｓ０２７地区では外部との接触がある場合、予め身元を示す書類と軍による審査がある。彼女はその中の１つである〝人形か人間か〟の回答に不備があった。書類には「人間」と書いてあったが、人形に反応する金属探知機とスキャナーが「人形」と反応した。更に「鉄血」と診断され、一時期現場はギスギスした空気が流れていた。相手側の指揮官からの申し出があり、味方だと判明するまで警備兵達は彼女に銃口を向け発砲する寸前だった。

「ギムレットさん、困ってますよ。ほら、離れて待ちましょう」

Ｍ２００はギムレットの肩に手を置いた。ギムレットは振り返る

と愚痴をこぼした。
「だって、遅いし話してくれないし……」
「虚偽申告したギムレットさんが悪いんですよ。ただでさえ鉄血の人形なのに」
その一言を突かれたギムレットは苦虫を潰した顔になった。
「だってさ、気づかれるなんて思ってなかったんだもん……」
ＳＡＦもＭ２００の援護に入る。
「そりゃそうだよ。あれだけ指揮官から忠告したのに一切無視したんだからさ」
ＳＡＦの一言がトドメの一撃だったのか、ギムレットは苦笑いを見せた。その後もＭ２００からの説教が続けられたが、彼女の目はＳＡＦやＭ２００を見ていなかった。彼女の目は前方の兵士を見ていた。兵士は無線機を取り出し連絡を取り合っていた。目出し帽のせいで口元が隠れていたが、彼女にとっては無意味に等しかった。聴覚モジュールの感度を高め目の前のやり取りに集中した。
『……もうすぐ……はい、わかりました。そちら……』
断片的に会話を聞き取り旅の終わりを察した。もっと情報を集めるため、視覚モジュールを制限し聴覚の感度を上げようとした。
「聞いてますか？ギムレットさん？」
Ｍ２００の顔が目の前に現れる。まるでホラー映画のジャンプスケアのシーンを彷彿とさせるものだった。さらに聴覚の感度を上げていたせいで、小声にも関わらず雷鳴のような響きだった。予想外の出来事にギムレットの体は少し震えた。さらに思わず素っ頓狂な声を上げた。
「ヒャッ！びっくりした！」
「また人の会話を盗み聞きしてましたよね」
Ｍ２００が呆れた声で再び説教し始めた。先程の偽装の罪に加えて盗聴の罪が上塗りされた。Ｍ２００の説教は、少々長くなりそうだった。しかし２人の視線はギムレットから外れてしまった。エレベーターが目的地へ到着する音を告げたのだ。
エレベーターが到着すると２人の兵士が前に並んでいた。ドアが

ゆっくりと開き、別世界への景色を映し出した。３人はその景色に唖然とした。小さな街が形成されている――その事実に一同驚愕したのだ。２７地区への最初の一歩を踏み出したのはＭ２００だった。
「……！」
そこは、様々な人々の活気と大小様々な人混みに溢れていた。Ｓ０８地区も同じように活気に溢れている。しかし治安の点について、Ｓ０８地区はこことまったく比較にならない。例えば、一区を勝手に支配しみかじめ料を払うように脅すギャング。鉄血のせいで帰る家を失った不良達。Ｍ２００はこの理想的な世界に思わず目を丸くし――そして、自然と笑みが溢れていた。ギムレット達も同じだった。まるで遠足に参加した子どもたちのように辺りを見渡していた。しかし、遠足気分は長くは続かなかった。
「ギムレットさんですか？」
突如ギムレットに話しかけてくる職員が現れた。年齢は２０前後、服装は上下カーキ色の戦闘服。後方支援担当なのか半袖で身軽そうだった。髪もヘルメットなどが干渉しないくらい短かった。話しかけられたギムレットは頭を縦に頷き、敵意を感じさせないよう笑顔で答えた。
「そうだけど……　貴方は？」
男はその場で敬礼をし自己紹介を始めた。
「マクディランです。ハンク指揮官から連絡を受けてここにいます」
「ＯＫ、分かった。で、その内容は？」
「ミーティングルームに来てほしい、とのことです」
ギムレットはその一言で全てを感づいていた。
「了解、案内してもいいかな」
「ええ、勿論ですとも。ではついてください」
・９：５３　ミーティングルーム
今回の作戦に参加する人形たちはミーティングルームに集結していた。その数は通常の作戦の倍近くにのぼる。普段は饒舌な人形ですら思わず黙ってしまう程、静まりかえっていた。普段はヘリポート前や仮想空間で簡易的に行う事が多い。そのため、このような正式な

ミーティングをするのは初めてだった。作戦に参加する人形達はパイプ椅子に座る。座った人形達は自身の銃を弄ったりヒソヒソと話したりしていた。人形たちが席について1分後、指揮官とその他2名の軍人がドアを開けて入ってきた。一人目は５０歳後半の老将で、所々白髪が混ざっておりかなりの貫禄があった。二人目は３０歳後半のタフそうな軍人で、こめかみから鼻の下に続く口ひげがトレードマークだった。その2人はスクリーンの隣にあるパイプ椅子に座った。指揮官はスクリーンの目の前に立つと、演説をするように人形達に話しかけ
た。
「これより、本作戦の概要を説明する。ガリソン少将、お願いします」
指揮官に呼ばれたガリソン少将と呼ばれる老将はゆっくり立ち上がる。ガリソン少将は腕組みをすると口を開けた。
「全員、飯は食べたか？」
その質問に各々答えた。タイミング、声量はバラバラだったが全員「ＹＥＳ」ととれる回答だった。それを聞いた少将は「そうか」と答えて一笑すると、すぐに真剣な表情に戻った。
「では話に戻ろう。先週鉄血の貨物列車に我が軍の工作員が潜入したところ、通常の運搬量より鉄血素体が多く積まれていた。またジュピターが5門、分解された状態で確認された。これらから推測するに、奴らはこれを何処か一箇所に集めていると思われる」
少将の説明が終わると同時に、スクリーンに映された画像が変化する。スクリーンには駅を真上から撮ったと思われる写真が映された。通常の駅とは違い、四隅には第二次大戦のような古い高射砲が構えていた。
「これは先月、鉄血に占拠されたカタル駅の上空写真だ。この四隅にある砲台はドイツ製１２０ミリＦｌａｋ―５８連装高射砲。敵機が侵入すると、赤外線レーダーで目標を追尾し射撃する。発射速度は大して速くは無いが、喰らうとひとたまりもないのは明らかだ。人形ですら蒸発して消えるかもしれんな」
淡々と事実を述べていく少将。しかし後半の内容があまりにも

生々しく、一部の人形達はざわついた。
「これを掻い潜るには陸路しかない、と思うかもしれないが陸路のほうが危険だ。まず、この駅周辺は障害物がないため、高台からはこちらの侵攻がはっきりと見えるはずだ。恐らく、鉄血の弾幕に晒されることになるだろう。さらにこの高射砲、厄介なことに仰俯角が非常に取りやすい上に、地上目標ですら攻撃できる。つまりこちらが手出しする前に一方的にやられるだろう」
少将の発言から困惑の波紋が広がる。勝てるわけがない戦争をする、そう宣言するのとほぼ同義であるからだ。一気に困惑と疑問が伝播し騒ぎ始める。いくら戦い慣れている戦術人形ですらこの任務は不可能と考えていた。少将は「だが」という一言でその騒ぎを黙らせた。
「いくら強力な陣地とはいえ、人が作ったものには穴がある。コイツの弱点は排気の温度が低い航空機なら補足できない点だ。そこで我々が出した答えは空挺で降下、素早く敵陣を攻め落とすことだ」
少将が言い切るとスクリーンが写り変わった。先程まで高射砲が写っていたが、今度は双発機が映っていた。ずんぐりむっくりとしたエンジンが2機。そのエンジンと大きな翼に挟まれている巨大な胴体が印象的だ。その巨漢が鈍足で小回りが苦手なのは目に見えている。しかも銃座などの防衛装置は無かった。頭部が民間機にも見えるため、それがますます人形達の不安を誘った。
「コイツはC―47スカイトレイン、WW2で活躍した老兵だ。これに搭乗して、まず君等はここに降下する」
スクリーンは先程の上空写真に変わる。しかし、その写真は駅と貨物置き場に緑の丸が書き加えられていた
「まずAチームは駅へ、Bチームは貨物倉庫、Cチームは防衛装置へ強襲をかける。駅には貨物列車が止まっているため、これを速やかに奪取する事が先決だ。Bチームは貨物倉庫に潜む鉄血を倒した後、列車に積み荷を運んでくれ。Cチームは対空砲、出来れば鉄血に指示しているコンピュータの起動を停止させろ。この緑で囲った地点は、安全に降下出来る地点だ。君が1人で戦争を終わらせるつもりなら、どこ

に降下しても構わない。ただし支援はないと思え」
「最後に、君たちが降下し終えて数分後に弾薬などの支援物資が降下される。支援物資は緑の地点から数十メートル離れた先に降下される予定だ。さらに作戦当日は、レシプロ機による支援が見込まれる。敵の混乱を突いて迅速に行動しなければならない。では最後に君達の隊長達を紹介しよう」
　そう言うと指揮官と髭が目立つ軍人、ショートヘアの気さくそうな女性が立ち上がった。
「まずはＡチームはハンクこと、指揮官だ。紹介はいいだろう。私より君たちのほうが知ってるからな。次にＢチームはバリー・プライス大尉だ」
　プライス大尉と呼ばれた軍人はその場で敬礼を行なった。
「彼は元ＳＡＳで今は我が軍の特殊部隊の隊長を担当している。最後にＣチームだが、これは御本人から紹介したいと要望があったので任せる事にした」
　Ｃチームの隊長こと青髪の女性は敬礼を行なった。しかし大尉とは違い、どこか親しみやすい印象だった。
「私の名前は☒ギムレット☒Ｓ０８地区の戦術人形。こう見えても指揮はバッチリだから安心して背中を任せて」
　ギムレットの一言に辺りがざわついた。戦術人形の多くは指揮ができない。その上見た目は戦術人形より人間に近く、異様な存在に戦術人形達は互いに顔を見合わせそうになった。　しかし少将の一言で辺りは水を打ったように静まった。
「作戦は2時間後。チーム編成はこのミーティングが終わり次第発表する。必ず目を通しておくこと。では解散」
　その一言で人形達は、蜘蛛の子を散らすように席を離れた。人形達がいなくなったことを確認すると大尉はギムレットに話しかけた。
「なぁ嬢ちゃん、1つ質問がある」
「何？答えられる範囲ならなんでも聞いてもいいよ」
「実弾系の銃は持ってるのか？」
　その一言に固まってしまうギムレット。それもそのはず、彼女が使

う武器はエネルギー関係が多いのだ。ギムレットは開き直るようにして質問し返した。
「何か問題でもあるの？」
　大尉は大きく頷いた。
「あぁ、かなりの大問題がある」
　大尉は辺りを見渡すようなジェスチャーをとる。その動きは大きく受け手にとっては煽ってるように見えた。ギムレットは思わず首を傾げた。顔には疑問の二文字が浮かんでいた。
「簡単な話だ。俺の所属は〝グリフィン〟だ、それは分かるよな？」
「当たり前じゃない。それがどうしたのさ」
「グリフィンの使う武器は大抵実弾兵器だ。お前が使う武器はレーザー兵器だ」
「あぁ……　なるほどね」
　ギムレットはニッコリと笑みを浮かべた。その笑みは何を言われるのか完全に理解していた笑みだった。
「つまり私の存在が〝イレギュラー〟ってことね。存在したらお偉いさんに不利益だから」
「そのとおりだ。上はちゃんと空薬莢が出て硝煙の匂いが無いとイチャモン付けるクレーマーだからな」
「はは、結構言うね……　それで武器庫はどこ？」
　その一言に大尉は眉をひそめた。額のシワは寄り表情は困惑色に染まる。反対にギムレットは笑顔を絶やさなかった。
「案内してよ、武器庫にさ。大丈夫、適当に見繕ってくるだけだからさ。映画みたいに」
　その一言に傍観を貫いた指揮官が待ったをかける。
「すまんがそれは無理だ。一応武器庫にある銃は軍のものなんだ。だからおいそれと持ち出して、部外者に渡すわけにはいかないんだ」
「そのとおりだ」
　大尉は指揮官の言葉を肯定する。大尉はギムレットの顔を見ると笑いかけた。その笑みは今までと違った。何か腹黒いことを考えている、そんな笑みだった。

「ただ例外がある。アンケートには答えたか？」
「あぁ、あの町中で配ってそうなアレね。全部答えたけどなんで？」
　ギムレットは困惑していた。理由は単純、話の関係性が全く無いからだ。アンケートの内容は〝どんな武器が好きですか〟や〝最も交戦する距離は？〟といった質問が大半を占めていた。大尉は短い笑い声を上げるとギムレットの肩に手を置いた。
「そんな良いこの君に、我々が景品を用意した。飛行場の格納庫の中に黒のバンが止まってるはずだ。そこで景品が受け取れる。絶対に損はしないぞ」
「へぇ……　貴方、かなりのワルだね」
　ギムレットは再びニヤリと笑い出す。景品と称したブツがなにかすべて察しがついたのだ。
・作戦開始から３０分前　オリント飛行場
　ギムレットは貸し出されたバイクに跨がり舗装された道を走っていた。スピードは８０キロと少々速いが、ハイエンドモデルの前では些細な問題だった。髪が風になびきそのたびに心地よくなる。エンジンを吹かし道の先を目指す。そして目的地の全貌が明らかになった。飛行場には軍と思われる警備隊が数名巡回していた。金網越しから見える双発機達は暖機運転の真っ最中だった。エンジンの爆音が、離れた位置にいるギムレットにも聞こえていたのだ。ギムレットは飛行場に到着する。入り口にいる警備兵達に、グリフィンに所属していることを示すＩＤカードを見せる。カードの確認を終えた兵士たちはギムレットを通すと直ぐに業務に戻った。黒いバンを見つけるのに時間はかからなかった。機材や飛行機に携わるエンジニア、整備用のコンパクトな車両。そんな雰囲気とは別の空気を醸し出していたのだから。ギムレットはバンに近寄ると操縦席のドアを２回叩く。そして数秒間おき次は３回叩く。すると操縦席の窓が下がる。完全に下がり切るとメガネをかけた男がこちらを見ていた。
「ギムレットさんですか？」
「そうだけど……　貴方は何者だい？」
　メガネの男は一度会釈をする。

「申し遅れました。私、プライス大尉から景品を預かってるものです。今から贈呈しますので、お待ちください」
男は後部座席へ振り向く。すると大きなアタッシュケースを取り出していた。男は助手席から車を降りるとギムレットにアタッシュケースを手渡しした。ギムレットはアタッシュケースを貰うと中身を確認した。
「はは、予想通り……」
アタッシュケースを地面に置くと、手に持ってるものを慎重に眺めた。景品はＭＰ７Ａ２、Ｈ＆Ｋ製のＰＤＷと分類される小火器だ。しかしオリジナル品と比べ改造が施されていた。まずはグリップとフォアグリップ。持ち主が人形ということを考慮してあるのか磁石が内蔵してあった。人工皮膚腰からも分かるほど吸着し手に馴染みやすい。次はストック。スライドストック特有の金属音が軽減されている。どんなに乱雑に扱っても大きな金属音がしなかった。これらの改善点はいずれも使用者の要望を全て叶えていた。ギムレットは銃を触りながら思わずため息をついた。
次はアタッチメント。これはＭＰ７が入っていたアタッシュケースについていた。まず取り出したのは×１～２のドットサイト。接近から混戦になることが多々ある事が多く、素早く敵の頭部に狙いを付けれるようにするためである。次に取り出したのはサプレッサーとフラッシュハイダー。サプレッサーは潜入や奇襲を行いやすくするため。フラッシュハイダーは敵との戦闘時、少しでも居場所を悟らせないようにするために全て本人が望んだものである。いずれも消耗品のため２つずつついている。最後にレーザーサイトを取り出す。ハイエンドでも精密射撃を外す恐れがある。そのリスクを少しでも減少させるため要望したものだ。色合いは赤だがポインターとしては小さい。それでもギムレットは精密射撃出来る自信があった。
「ありがとう、弾薬は？」
「トランクに。様々ありますのでお好きなものを」
ギムレットはトランクに移動すると両手でトランクを開けた。トランクが大きく弧を描くように開く。男の言う通り弾薬があった。

しかし想像以上の光景が広がっていた。そこには様々な弾薬が１０マガジン以上あった。通常の４．６×９ミリをはじめ焼夷弾や徹甲弾。中にはＨＥ弾や電気ショック弾といった見たことが無いものまであった。ギムレットは通常弾と徹甲弾、そして焼夷弾を３マガジンほど拝借する。ギムレットは

「ありがとう、なにからなにまで」

と感謝の言葉を告げると後ろを振り返る。

そこには、パラシュートを背負った人形たちが列をなしていたのだ。

3―2　降下

ＦＧ４２は輸送機であるＣ―４７スカイトレインに乗りながら、窓から見える景色を眺めていた。あたり一面広がる青空に、お菓子のようにフワフワとした白い雲がポツリポツリとある天気は、晴天そのものだった。高度３４０メートルから見る青空という普段は見ることができない風景は、絶景といっても過言ではなかった。これがもし任務じゃなかったらきっと他の子たちと会話してたに違いない、彼女はそう思った。

しかし、他の人形たちと会話することはほとんどなかった。というのも選ばれたメンバーの多くは寡黙で、多くは武器を弄っていたり、持ち込んだレコーダーで音楽を聞いていたりと各々時間を潰していたからだ。声の他に聞こえるとすれば輸送機のエンジン音だろう。扉を閉めていても、そのけたたましい音だけは聞こえた。普段搭乗するヘリのローター音で騒音に慣れているとはいえ、爆音であったのには変わりない。さらに機体は少しであるが振動しており、揺れは自分の足を通じて伝わる。そのため体は小刻みに揺れていたが大した悪影響はなかった。　むしろ不規則に揺れる感じが、ヘリとは違う揺れで心地よかった。ＦＧ４２はチームメイトを確認するため辺りを見渡した。自分が最後尾にいるため、全員の顔ぶれを確認出来るのだ。先頭からＡＫ―７４Ｍ、ＡＫ―７４Ｕ、モンドラゴン、８９式、ベクター、ＰＫ、Ｍ６ＡＳＷ、ＳＶＤ、ＰＰ―１９。そして目の前で腕時計を見ながら葉巻を吸ってるプライス大尉の計１２名。これが３チームほどあり合計で３６人程が作戦に参加することが決定している。更に航空隊の支援や援軍も数に含めると、総勢５０人以上は確定している。今までこれほど大規模で大胆な作戦を経験したことはないＦＧ４２は、緊張で顔が固くなった。いつも真面目な彼女だが、いつも以上に表情がガチガチになっていた。

「こういうのは初めてか？」

彼女の表情を見かねた大尉は話しかけてきた。吸っていた葉巻はまだ手に持っている。ついさっきまで吸っていたのか、先端は赤く燃

えモクモクと煙があがる。タバコ臭い匂いがふんわりと漂うが、そこまで不快ではなかった。話しかけられたＦＧ４２は背筋を伸ばした。
「ええ。今まではヘリボーンが中心的だったので、このようなエアボーンは初めてです」
　彼女は背中に背負ってあるパラシュートを揺らした。かなり重たく、初めて背負った時は度肝を抜かれた。彼女が扱っているＦＧ４２は、大戦中のドイツの空挺部隊である降下猟兵向けに設計された銃だ。しかし、ＰＭＣという立場上空挺部隊めいたことはできなかった。そのため大半の人形達はパラシュートを使ったことすら無いのだ。作戦前、空挺降下用の報告書を読み込んだものの、ここにいる全員がリハーサルなしの本番であった。
「バンジージャンプと何ら変わりはない。そう身構えなくてもいいさ」
　大尉はＦＧ４２を安心させるために笑みをこぼした。ＦＧ４２も緊張を紛らわせるため、笑おうとした。突如、機内のランプが赤く光る。それは人形たちの肌を赤く染め上げた。
　レッドランプ、それは空挺降下準備を知らせる合図である。人形たちは一斉に立ち上がり、カラビナにロープを通す。自分と機体をつなぐ唯一の命綱。一通りの儀式を終えた人形たちは、ただグリーンランプになるまで待機する。彼女たちの目つきは穏やかではなかった。これから鉄血の命を刈り取る……　狩人そのものだった。
　大尉は立ち上がると、吸っていた葉巻を空に投げた。葉巻の煙が空へ吸い込まれ、どこかに消えていった。大尉は人形たちを見つめた。その攻撃的で闘志を隠そうともしない目つきは獲物を探す狼のように鋭く、そこに自慢に溢れた笑みが加わり、獰猛さが際立っていた。大尉は２，３歩人形たちの前へ歩くと、人形たちに訴えかけるように話しかけた。
「お前が奴（鉄血）を殺せばお前が上。お前が奴に殺されれば奴が上だ」
　人形たちに発破をかける。いくら鉄血が占拠している駅とはいえ、所詮は有象無象の集まり。苦戦し予定時間をオーバーすることはあってはならない。ましてや苦戦など論外だ。人形たちはそのこと

を肝に命じた。
　ランプが赤から緑に変わる。それはほんの一瞬の出来事だった。しかしパラシュートを背負った狩人の目は、その一瞬の変化すら感じ取った。人形たちは扉に向かって走り出す。道のりは遠くなく、あっという間に入り口にたどり着いた。空は自分たちは無防備だと敵に知らせる場所である。反撃できず、隠れるところもない。ましてやパラシュートが撃たれない保証も無い。ひとたび外に出れば、あらゆるリスクという死神がまとわりつく。言ってみれば弾幕の嵐に晒されながら、敵陣に突撃をするようなものだ。しかし人形達は青空に向かい飛び出していった。その目には恐怖心はなかく、そこには恐怖を乗り越えた自信と狂気があった。
　ＦＧ４２は風圧を感じながら重力に身を任せていた。風圧は凄まじく、顔に当たる風が不快に思うほどなびいていた。常に風を切り裂く音が耳元で聞こえ、その轟音は恐怖心を掻き立てた。それと同時に何か凄いことを成し遂げようとしているかのような高揚感も心の底から感じていた。降下して数秒後、ＦＧ４２はパラシュートを展開する紐に手をかけた。彼女は素早くそれを引き、擦れた布の音と共にパラシュートが展開した。パラシュートが展開し終えると布が広がる音が鳴り始めた。パラシュートのおかげで降下時のスピードがゆっくりとなった。体が風になびいて揺れる。勢いよく聞こえていた風切り音も落ち着いてきた。ＦＧ４２は仲間達が降下するところ、仲間たちが階段状に降下するところを見ていた。その光景はどこか幻想的であった。白いマッシュルーム達が空を覆い尽くし、ゆったりと落下する様はどこか幻想的な雰囲気でもあった。
　しかし下界は違った。地上から空襲警報が騒がしく鳴り響き、随伴していた攻撃機達は既に攻撃を行っていた。所々炎上しており、赤く燃え上がった炎と煙が上がっている。攻撃機の多くは、古代の遺物であるＪｕ８７スツーカであった。ＦＧ４２は高射砲付近のストライカー達めがけて急降下するスツーカを目撃した。風切り音とは到底思えない甲高い音。それと共に投下される２５０ｋｇ級榴弾が鉄血を襲い、爆風と共に鉄血たちの四脚が吹き飛んだ。破滅の象徴である

ジェリコのラッパが鳴り響いていた。改めてＦＧ４２は地面を見ていた。ゆっくりとであるがその地獄に近づいている。爆音、銃声、空襲警報。混沌へゆっくりと近づく……

この混沌に秩序をもたらすのは我々しかいないのだ。

ＦＧ４２は降下に成功すると背負っていたバックを脱いだ。パラシュートを展開したバックは非常に重く、機動力は全く無い。勿論、背負っている状態で戦闘をしようものならいい射撃の的になる。ＦＧ４２は素早くバックを放棄すると自身の得物を手に取り、マガジンを差し込むとコッキングレバーを慎重に引いた。重い金属音を響かせ薬室に７．９２×５７ｍｍマウザー弾が装填された。貨物倉庫とあって付近には貨物コンテナが並んでいた。ＦＧ４２はコンテナの間からひょっこり現れたヴェスピドと遭遇した。ヴェスピドはこちらを発見すると銃を構えたが、ＦＧ４２の方が早かった。ＦＧ４２は頭部を狙うとトリガーを引き、銃声と共にライフル弾がヴェスピドを襲った。数発受けただけでバイザーが割れ、頭部の配線やパーツが飛び散った。残骸となったヴェスピドは後頭部から倒れる。素早く敵を倒すと、目標を達成するため前進した。

前進し始めて１分後、無線から作戦の指示が入った。

『こちらマジックから全小隊へ。各自目標を達成せよ。スツーカの攻撃は中止とするが、各隊長の指示から実行出来る』

長距離からの無線なのか雑音が混じる。本来なら雑音を無くすためにチャンネルを再設定し、もう一度無線を行うのが一般的であるが、今回のような一刻を争う場合は、無視される行動でもある。ＦＧ４２はコンテナの角を確認しながら素早く移動していた。

数分後、ＦＧ４２は目の前で炎上していたガードを目撃したが、その後銃声と共にガードは地面に倒れた。

「ベクター?」

ＦＧ４２は思わず呟いた。運良く無線越しだったのか聞こえていた。

『そこにいるのはＦＧ４２?』

ベクターはコンテナの角からひょっこり現れた。銃口は下を向い

ており臨戦態勢から離れていた。ベクターは燃え尽きたガードの亡骸を蹴って、死体かどうか確認していた。
「他の人形達は何処に降下したか分かりますか？」
「いや、私もわからない」
　ベクターは装填したマガジンを一度取り出し残弾数を確認し、それを再び装填し直すとＦＧ４２の方を見直した。ベクターの表情は、心ここにあらずといったところだった。
「だけど、あそこから銃声があった」
「わかりました。では、一緒に行きましょうか」
　ベクターはＦＧ４２の提案を了承した。小さく頷くと向こうを見ていた。
「ええ、行きましょうか」
　・作戦開始から2時間後。Ｃチーム、防衛装置。
　Ｍ２００は防衛施設に入り込んだ。ほんのちょっと前までここは激戦区だった。２階からイェーガーや鉄血に乗っ取られたタレットの精密射撃。それに加えて、地上ではスカウトやリッパーの後ろからヴェスピドやストライカーの弾幕が飛んでいた。ＳＧやＳＭＧ、ＨＧはこちらにヘイトを向けるため、最前線に突出する形で陣取った。一方でＲＦやＡＲ、ＭＧはありったけの火力を防衛部隊に浴びせた。
　２００以外にはギムレット、ＫＳＶＫがコンソールへ集まっていた。
「汝、これをハッキングできるとは本当か？」
　ＫＳＶＫの改まった質問とは対照的にギムレットはフランクに答えた。
「まぁね……　時間はかかるけど、ちょっと待ってて」
　ギムレットは手元にあるキーパッドを操作した。モニターにはおびただしい文字列が現れた。ギムレットのタイピング速度はどんどん速くなった。施設にはタイピング音だけ聞こえた。周りにいる人形達は彼女が成功するか、失敗するか見守っていた。数分後ギムレットはエンターキーを押した。ロックがかかってたモニターは解除され、ホーム画面が現れていた。

「ふー終わった」
　ギムレットは一息つくと肩をおろした。緊張で力んだ体がゆっくりと柔らかくなる。
「お疲れ様です、ギムレットさん」
　ＨＳ２０００は一声かける。見守っていた人形たちから感嘆や驚きの声が上がった。
「ありがとう。けどまだ任務は終わってないけどね」
　ギムレットはコンソールを弄ってある項目を探した。それは目標とは関係ないものだが、我々にとっては必要なことだった。
「えーと……　まずは高射砲の電源をシャットダウン……　列車の出発許可をこちらに移管、起動してない鉄血の起動無効と……」
　彼女が発した言葉の多くはこちらの戦局を有利にするものばかりだった。ギムレットがコンソールを弄り始めて１分後、作戦本部から無線が聞こえてきた。
『こちらマジックから各小隊へ。高射砲の沈黙を確認。これにより対地支援が可能になった。繰り返す、対地支援が可能になった』
　無線のチャンネルが変わる。先程のクリアな無線とは違い雑音だらけだった。さらに音質も悪い。航空機からの無線だと一瞬でわかるほどである。
『こちら〝ミラージュ１〟。いつでも対地支援ができる。もし俺たちの支援が必要なら、敵陣にフレアを焚くか、座標を教えてくれ。いつでも更地にしてやる』
　ミラージュ１と名乗ったパイロットの声は年季が入っていた。年齢は３０後半～４０前半で、かなり落ち着いていていた。声も興奮せずとても静かで、雑音があるのにも関わらず聞き取りやすかった。それと対照的に慌てふためいた無線が入り込んできた。
『こちらチームＡ！思った以上に敵の攻撃が激しい！支援を要請する！』
　・時を同じくして
　チームＡは駅構内に立て籠もってる鉄血たちに苦戦していた。数が多い上にこちらが隠れられる場所があまり無ため、その結果あまり

有効打を与えられていなかった。
　ＷＡ２０００は制圧した監視塔から狙撃をしていた。倒した鉄血人形達はバリケードとデコイを兼ねてＷＡ２０００の側に立てかけてあった。スコープを覗き駅構内に立て籠もっているイェーガーへカウンタースナイプを開始した。スコープの逆光、銃声やマズルフラッシュ。ありとあらゆる手がかりを集め、狙撃手を特定し一撃で沈める。ＷＡ２０００は殺られる前にイェーガーを狩り尽くす。次のイェーガーを探す時だった。スクラップになったヴェスピドに至近弾が命中し、灰色のヘルメットに青い光線がぶつかった。鈍い金属音を響かせてヴェスピドは高台から落下する。
「ぁぁぁぁぁ!!もう!!」
　ＷＡ２０００は悲鳴のような叫び声をあげると無線機を乱雑に掴んだ。
「ねぇ!まだ突入してないの!?さっさと突っ込みなさいよ!」
　ＷＡ２０００の無謀な提案に指揮官は冷静になだめた。
「無理だ。この弾幕で突撃したら蜂の巣になる。航空支援を待ってくれ」
「待ってる間に死ぬわよ!このまま撃たれて死ねっていうの!?」
「少し待ってください」
　無線に割って入ったのはＭ８２Ａ１だった。Ｍ８２Ａ１は貨物コンテナの上にうつ伏せで陣取り、バイポッドを展開しスコープを覗いた。今回、Ｍ８２Ａ１はＩＯＰからとある装備を受け取っていた。その名も　Ｂａｒｒｅｔｔ（バレット）　Ｏｐｔｉｃａｌ（オプティカル）　Ｒａｎｇｉｎｇ（レンジング）　Ｓｙｓｔｅｍ（システム）　ＯＲＳＢの略このスコープは計測データを元に自動的にダイヤルを回すという、狙撃を補助する弾道コンピューターが備えられており、ＴＥＣ―９から受け取った観測データに加え自身の観測データを使い位置を予測した。彼女はＷＡ２０００を襲ったイェーガーの位置を割り出した。Ｒａｕｆｏｓｓ　Ｍｋ．２１１多目的弾徹甲弾・炸裂弾・焼夷弾の三つの機能を持ったＨＥＩＡＰの一種。タングステンの弾芯により高い装甲貫通力を持ち、貫通後に内蔵した爆薬が炸裂し被害を拡

大させる。あまりにも高威力のため、この弾薬を使用している大多数の国は、人間に対して使用しない訓練をしている。を装填すると、改めてスコープを覗いた。ＷＡ２０００を襲ったイェーガーを発見するとトリガーに指を掛け、敵に気づかれる前に素早くトリガーを引いた。その瞬間、頭が割れるほどの轟音と射手を覆うほどの発射煙がＭ８２Ａ１を包み込んだ。弾丸はイェーガーの頭へ吸い込まれ、頭部に被弾したイェーガーは大きく後ろに飛んだ。命中した頭部から乱雑に引きちぎられた配線やパーツ、粉々に砕けたバイザーが宙を舞った。しかしそれはあまりにも短い出来事だった。空を舞った亡骸と頭部の一部は地面へ落下し、そして鈍い音と共に地上へ落ちた。

脅威を排除したＭ８２Ａ１はすぐさま指揮官に報告した。

「脅威の排除を確認。ＷＡ２０００、大丈夫ですか？」

「あ、ありがと……」

ＷＡ２０００は頬を赤らめ口を窄めた。心配されてるとは思ってもいなかったのだ。

『こちらミラージュ１からチームＡへ。対地攻撃を敢行する。巻き込まれないように離れてくれ』

「到着時刻は？」

指揮官が食いつくように質問する。

『もうすぐだ』

その宣言通り何処からともなくあの不気味な音が聞こえる。サイレンとも思えるあの風切り音。思わず身を隠し耳を塞ぎたくなるほど不気味な音。一度聞いたら脳内にこびりついて剥がれない、あの音が聞こえるのだ。

指揮官たちはその場に伏せて身の安全を確保した。一方の鉄血は音の主を探した。

…それが彼女らに破滅をもたらすものと知らずに。

スツーカ隊は鉄血防衛隊に向かってダイブを行った。ありったけの爆弾や機銃を敵に浴びせ、破壊の鐘の音を響かせながら支援を行った。轟音を響かせ防衛陣地が更地へと変わる。

次々と振ってくる暴力の嵐の前で指揮官は準備を開始した。ス

モークグレネードを掴むと、
「チームに通達、スモークグレネードを投げろ。スモーク展開後、全力で駅へ突っ込む。ＲＦやＭＧは火力支援を。それ以外の人形はまっすぐ駅へ走れ。寄り道して倒されても回収しないからな」
と釘を刺した。指揮官達はマガジンの残弾をチェックしたり、合図があり次第スモークグレネードを投げられるように準備を開始した。そんな時、誰かが指揮官の隣へ身を屈めバリケードに背中を預けた。
「戦力は十分か？」
大尉だった。
彼は笑みを浮かべながら質問した。
辺りを見渡すと、大尉のチームがすでに合流していた。その目は命令を今か今かと待っている猟犬そのもの。
指揮官の回答は１つしかない。
「問題ない」
大尉と同じように笑みを浮かべて答えた。何か悪いことを企んでそうな、自信に満ち溢れた笑顔だった。爆撃が止み辺りが静寂に包まれる。先程まで鳴り響いていた銃声はパタリと消えた。不気味なほど静かな戦場に、指揮官はなんのためらいもなくスモークグレネードを投げる。軽い金属音をなびかせ地面に転がり落ちる。数秒後、煙幕が霧のように辺り一面に広がる。その光景を見た指揮官は立ち上がり銃を構えた。
「突撃！前進！進め!!」
煙幕が展開している中、戦術人形は全速力で走った。コンクリートで舗装された大地には、生々しい爆撃痕が辺りに広がった。前が見にくい中、彼女たちはその穴を器用に避ける。ＩＯＰ製のスモークグレネードは通常のものとは違い、戦術人形の目には煙幕の影響はまったくない。これはＩＯＰ製のスモークなら、予め処理パッチを装備することで煙幕のデメリットを無くすことが出来るためであった。手足や胴体が吹き飛んだ鉄血にトドメを刺しながら前進する。奴らは一見無力な存在にも見えるが、実際は違う。片手が吹き飛んでも銃を手に取り戦術人形を狙い、仮に手が無くても足を動かし接近する。

「死守」その命令を遂行するため動き続ける。戦術人形達はそんな彼女らを葬り去った。銃撃、打撃、刺突。様々な方法でトドメを刺していく。その姿は狩人というよりも、むしろ殺戮者であった。

駅構内へたどり着くと抵抗はほぼなかった。防衛戦力は駅を守るように展開していた証拠だった。2階に陣取っている残存部隊は散った仲間と同じように抵抗するが、そんな抵抗は些細なものだ。鉛玉や焼夷グレネードの嵐を浴びなき者へとなり変わり、残存部隊が壊滅するのに数分もかからなかった。指揮官は腕時計を見た。目標時間より早く任務を達成し思わずガッツポーズをしそうになるが、なんとか我慢し報告を最優先で行った。

「こちら、チームAより司令部へ。予定時間より早く駅構内の制圧に成功。繰り返す、制圧に成功。どうぞ」

『こちらマジックから全チームへ。作戦の第1フェーズを完了した。これにより、第2フェーズへ移行する。補給物資をそちらに送る』

「了解、通信終了」

指揮官は無線を切ると部隊を集結させた。

「第2フェーズ……???」

ギムレットは困惑した。ブリーフィングにはなかった単語ゆえに、何をすればいいのか分からなかった。唖然としている彼女を放っておいて、大尉と指揮官は下ごしらえを開始した。操作パネルでクレーンを操り積荷を搭載していく。鉄血の素体や弾薬、武器等が無傷の列車に積まれていくその様子は、どこかへ向かうことが確定しているかのようだった。

「ねぇ……何してるの？」

ギムレットは困惑した表情で大尉に話しかけた。大尉は表情を曇らせた。

「……聞いてないのか？」

「全然。何かプランBがあるのかしら？」

それを聞いた大尉は深いため息をついた。そして

「あのオイボレが……」

と小さく毒づいた。彼はギムレットにデータパッドを見せた。そ

こには〝フェーズ２〟と書かれていた。そのまま操作すると膨大な文字が現れた。これが作戦概要というのは聞かなくても分かる。
「フェイーズ２の簡単な説明をする。この列車を奪い、この先にある鉄血の大規模な貨物集積場を襲う」
「いきなりすぎない？」
「まぁな。秘密事項だし何より外部に漏れることを危惧したんだろう。敵を騙すときはまずは味方から・・・・ いかにも好むみそうな手口だ」
　大尉はポケットから葉巻を取り出し口に加えた。さらにジッポライターも取り出して火を付けた。葉巻の独特の匂いがふんわり香ってくる。大尉は一杯吸い終わると話し始めた。
「秘密主な爺さんのことだ。『後で教えるつもりだった』とか言うつもりだったんだろうな」
「はぁ・・・・・ 貴方の上司、複雑すぎない？」
「いつものことさ。交渉と秘密が大好きな爺さんさ」
　大尉はふと笑った。苦笑いにも見える笑みだが、場を和ませるには充分だった。その顔を見たギムレットも思わず笑みを浮かべた。戦術人形たちと指揮官達は貨物列車を整備し始め、貨物室には起動していない鉄血人形や防衛用のタレットを詰めた。しかし勿論これらは鉄血を欺く囮であり、本命はわざと積荷を積んでいない貨物室である。この中に武装した戦術人形を乗せ、目的地に到着次第防衛戦力に鉄の雨を降らせる。貨物室の分厚い装甲と戦術人形の火力が擬似的なトーチカとなることで、チームの生存性が増加する算段であった。
　指揮官と大尉は先頭に乗り込み、それぞれ準備を開始した。指揮官はタブレット端末を操作し目的地と走行速度を設定する一方で、大尉は対鉄血用のジャマーを起動した。これは鉄血のＩＦＦＩｉｄｅｎｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ Ｆｒｉｅｎｄ ｏｒ Ｆｏｅ 敵味方識別装置。電波などを用いて索敵範囲内の艦船、航空機が味方であることを確認する装置のことを妨害することができ、さらにこちらの存在は味方（鉄血）として認識させる装置である。
「こちらＣチームのＭ２００です。全員乗り込みました」

その連絡を聞いた指揮官は運行ボタンを押す。するとエンジンがゆっくりと音を立てて起動した。予め設定した目的地まで一切操縦せず自動的に動く。画期的なシステムだが指揮官は緊張していた。何故なら自ら敵陣に向かう、それは自殺行為に等しい作戦だったからだ。大尉はその緊張を見抜いていた。指揮官の肩を叩くと、

「緊張してるのなら、何か話して気でも紛らせたらどうだ？ここにいる全員にとかな」

「あぁ、いいアイデアだな」

指揮官は無線のチャンネルを設定し直した。

「こちら指揮官から全人形へ。先程の襲撃はとてもいい動きをしていた。予定より早めに達成できたのは皆のおかげだ。ありがとう」

数秒間の無言の後、指揮官は再び口を開いた。表情は先程に比べるととても明るかった。

「さて、次の行き先は終点の〝ラカスタ〟駅だ。ここは鉄血のボスが常駐してるかもしれない。かなりの激戦区になると思われるだろう」

これから起こるであろう逆境や苦難、試練を考えた。しかし今はそんなことはどうでも良かった。何故か心が軽く自身に満ち溢れていた。指揮官の顔に笑顔が生まれた。その笑顔は　いつにも増して自信に満ち溢れていた。

「Welcome to the battlefield. There is